

# 農村

宮本百合子

青空文庫



## (一)

冬枯の恐ろしく長い東北の小村は、四国あたりの其れにくらべると幾層倍か、貧しい哀れなものだと云う事は其の気候の事を思つてもじき分る事であるが、此の二年ほど、それどころかもつと長い間うるさくつきまとうて居る不<sup>ふさく</sup>作と、それにともなつた身を切る様な不景気が此等みじめな村々を今一層はげしい生活難に陥れた。

企業的な性質に富んで居た此家の先代が後半世を、非常に熱心に尽して居た極く小さな農村がこの東北の、かなり位置の好い処にある。

かなり高くて姿の美くしい山々——三春富士、安達太良山などに四方をかこまれて、三春だの、島だのと云う村々と隣り合い只一つこの附近の町へ通じる里道は此村のはずれ近く、長々と、白いとりとめのない姿を夏は暑くるしく、冬はひやびやと横わつて居る。

町のステーションから、軒の低い町筋をすぎて、両方が田畠になつてからの道は小半里、つきあたりに、有るかなしの、あまり見だてもない村役場は建つて居る。和洋折衷の三階建で、役場と云うよりは「三階」と云う方が分りやすい。

この「三階」につく前少しの処に三つ並んで大池がある。並んで居る順に一番池二番池と呼ばれ、三番池は近頃まで三つの中で、一番美くしい、清げな池いけであつた。四五年前から、この村と町との間に水道を設ける事の計画が一番池が有るために起つて居た。

町方まちかたから小半里の間かなりの傾斜を持つて此村は高味にあるのでその一番池から水を引くと云う事は比較的費用も少しですみ、容易でも有ろうと云うのでその話はかなりの速力で進んで、男女の土方の「トロツコ」で散々囲りの若草はふみにじられ、池の周囲に堤を築かれ堤の内面はコンクリートでかためられ、外面には芝を植えられて「この池の魚釣る事無用」「みだりに入るべからず」と云う立札が立ち、役人のいる処や、標示板の立つたはもう二年ほど前の事である。

そのために、湖の様に、澄んで広々と、彼方むこうの青や紫の山々の裾までひろがつて居る様にはてしなかつた池も、にわかに取り澄まして、近づき難い、可愛げのない様子になつて仕舞つた。

その頃、かなり一番池とは、はなれて、その岸辺は葦でみたされ堤は見えない処で崩れ落ちて、思いもかけぬ処から水田に、はてしなく続いて居る。

この池の堤の裏を町に行く里道の道とも云うべきのが通じて居る。

何の人工も加えられず、有りのまま、なり行きのままにまかせられて居るので、池は、何時とはなし泥が増して今は、随分遠浅になつて居る。

けれ共、その中央の深さは、その土地のものでさえ、馬鹿にはされないほどで、長い年月の間に茂り合つた水草は小舟の櫂にすがりついて、行こうとする船足を引き止める。

粘土の浅黒い泥の上に水色の襞が静かにひたひたと打ちかかる。葦に混じつて咲く月見草の、淡い黄の色はほのかにかすんで行く夕暮の中に、類もない美くしさを持つて輝くのである。

堤に植えられた桜の枝々は濃く重なりあつて深い影をつくり、夏、村から村へと旅をする商人はこの木影の道を喜ぶのである。

二番池の堤は即ち三番池の堤である。二番池の崩れた堤は、はるか遠く水田の中にかくれて完全に道のついて居る一方はいつとはなしに三番池の堤の一方を補つて氣のつかない間に、彼方に離れて仕舞う。

三番池は美くしい水草の白く咲く、青草の濃いのどかな池であつた。

この池に落ち込む、小川のせせらぎが絶えずその入口の浅瀬めいた処に小魚を呼び集めて、銀色の背の、素ばしこい魚等は、自由に楽しく藻の間を泳いで居た。この池は、この

村唯一の慰場となつて居た。

池の囲りを競馬場に仕立てて春と秋とは馬ばかりではなく、町々の、自転車乗が此処で勝負を決するのが常である。

夏は、若い者ものども共の泳場となり、冬は、諏訪の湖にあこがれる青年が、かなり厚く張る氷を滑るのであつた。此等の池の美くしいのも只夏ばかりの僅かの間である。山々が緑になつて、白雲は様々の形に舞う。

池の水は深く深くなだらかにゆらいで、小川と池の堺の浅瀬に小魚の銀の背が輝く。こうした生々した様子になると、赤茶色の水氣多い長々と素なおな茎くきを持つた菱はその真白いささやかな花を、形の良い葉の間にのぞかせてただよう。

夕方は又ことに驚くべき美くしさを池の面と、山々、空の広いはてが表わす。暑い日がやや沈みかけて、涼風立つ頃、今まで只一色大海の様に白い泡あわをたぎらせて居た空はにわかに一変する。

細かに細かに千絶れた雲の一つ一つが夕映の光を真面まともに浴びて、紅に紫に青に輝き、その中に、黄金、白銀の糸をさえまじえて、思いもかけぬ、尊い、綾が織りなされるのである。

微風は、尊い色に輝く雲の片きを運び始める。

紅と、紫はスラスラとすれ違つて藤色となり、真紅と黄はまじつて焰と輝く。暗の中に輝くダイアモンドの様に、鋭く青いキラメキをなげるものがあれば、静かにおだやかに、夢の花の様に流れる。

一瞬の間も止まる事なく、上品に、優美に雲の群は微風に運ばれて、無窮の変化に身をまかせるのである。けれど、紅の日輪が全く山の影に、姿をかくした時、川面から、夕もやは立ちのぼつて、うす紫の色に四辺をとざす間もなく、真黒に浮出す連山のはざまから黄金の月輪は団々と差しのぼるのである。この時、無窮と見えた雲の運動は止まつて、踏むさえ惜しい黄金の土地の上を、銀色の川が横ぎつて、池の菱の花は、静かに、その瞼を閉ざすのである。

池の最も美わしい時、この池の尊さの染々と身にしみる時、それは只、真夏の夕べの、景色にばかり、池の真の価値は表われるのである。

此の村に置くには、あまりに美くしい池である。

山々の峰が白んで、それが次第に下へ下へと流れ来る毎に冬は近づくのである。

寒い——只寒いばかりの此の村の冬は只池にはる氷に若い者がなぐさめられるばかりで

ある。

けれ共、三月四月と、春の早い都に花が咲く頃になると、山々は雪解ゆきげの又変つた美くしさを表わす。

快く晴れ渡つた日、四方を取り卷いた山々の姿を見た時、誰でもその特長ある、目覚しさを讃美しないものはないのである。

雪の皆流れ落ちた処、まだ少し残つた処、少しも消えない処、等によつて皆異つた色彩を持つて居る。

皆雪の流れた処は、まだ少しもとけない処が雪独特の白さで輝くのに反して、濃い濃い紫色におうて居る。雪がまだらに、淡く残つてゐる処は、いぶし銀の様に、くすんだ、たとえ様もない光を放して居る。始めて一眼見た時は、ただそれだけの色である。

けれ共、その、まばゆい色になれてなおよくその山々を見つめると、雲の厚味により、山自身の凹凸により、又は山々の重なり工合によつてその一部分一部分の細かい色が一つとして同じのは無いのを見出すのである。

この様に、東北にはまれな、しなやかな自然の美は此村に沢山与えられたけれ共、物質の満足、精神的の美と云うものは、此村には十分与えられてない。絶えず、不自由に追い

掛けられて、みじめな、苦しい生活をしなければならない理由。それは、その村人自身にならなければ分らないけれども、気候が悪いし、冬の恐ろしく長い事、諸国人の寄合つて居る事、豊饒な畠地の少ない事、機械農業の行われない事、などは、他国者でも分ることである。

明治の初年、この村が始めて開墾されてから、変った生活を求めて諸国から集つたあまり富んでいない幾組かの家族は、あまり良いめぐり合わせにも会わないで、今に至つて居るのである。

米沢人はその中での勢力のある部に属して居る。日常の事はさほどの事はないけれども、少し重立つた事になると生國の違いと云う感じが都の者ほどさっぱりとは行かず、とげがたいわだかまりになつてお互<sup>たがい</sup>の一一致を欠くのであつた。

土地の大抵は粘土めいたもので赤土と石ころが多く、乾いた処は眼も鼻も埋めて仕舞いそうな塵となつて舞いのぼり、湿つた処はいつまでも、水を吸収する事なくて不愉快な臭いを発したり、昆虫の住居になつたりする。長年耕された土地でさえも肥料の入るわりに良い結果は表れない様な地質である、その上に耕すのも、ならすのも、収穫するにも、工<sup>こう</sup><sub>こ</sub>業<sup>ぎょう</sup><sub>う</sub>的<sup>てき</sup>の機械を用うる事はなく、鍬<sup>くわ</sup>、鋤<sup>すき</sup>、鎌<sup>かま</sup>などが彼等唯一<sup>ゆい</sup>の用具であくまでもそれ

保守して、新らしい機械などには見向きもしない有様で、それだから機械などはほとんど村に入り込んでは居ない様子である。

地質がよくないとは云え、機械農業が発達さえすれば、今までより少しは多く収穫があるのは定まつた事だらうのに、農民は、発明される機械を試用する気にならず、又其を十分利用するだけ、序的な頭脳は無いものの方が多いのでもあろう。

斯うして、荒れやすい土を耕し、意地の悪い冬枯と戦うにも只、昔からの伝習だの、自分分の小さい経験などを頼む事ほかしない。此処いらの純農民は、随分と貧しい生活をして居る。

養蚕ようさんは比較的一般に行われて、随つて桑烟も多い。けれ共、大業にするのではなく、副業ふくぎょうにしているのだからその利益もされたものである。

一年の間、春、夏、秋、と三度蚕を飼つてあがる利益みいいりと、自分の畠のものを売った利益などで純農民は生計を立てて行かなければならぬ。

表面上は立派に自由の権利を持つて居る様では有るけれど、内実は、まるでロシアの農奴の少し良い位で地主の畠地を耕作して、身内からしぼり出した血と膏は大抵地主に吸いとられ、年貢に納め残した米、麦、又は甘藷、馬鈴薯、蕷麦粉そばこなどを主要な食料にして居

るのである。

小半里離れた町方に彼等は主に地主を持つて居た。この町はこの頃になつて急に目覚ましい活動をはじめた町で、金錢の活動はにわかに、せわしくなつて来ても依然として、それ等金錢をあつかうものの頭は、金錢につかわれる方なので、驚くほど物質的な、金にきいたない町になつて来た。

そのためこの四五年と云うもの只金ばかりに氣を取られて居る町の地主等は、年貢米の一斤一合の事までひどくせめたてて、元もと、半俵位の事ならそうひどい事も云わず来年の分に廻しその補いに、野菜や麦を持って来させて居た自分等の心をあやしんでいるらしい様になつて來たのである。

四五年つづく不作と、地主等の悲しい心変りによつて苦しむ小作人は自分が小作人である事をつくづくと悲しがつて居た。

独立する資力がないばかりに、地主の思うがままにみじめな生活をさせられて子供の教育も出来ず、二度とない一生を地主に操られて、働きへらして飼殺し同様にさせられ仕舞う。

小作をしないで暮すと云う事は農民皆が皆の希望だろうけれ共、地主に飼殺しにされた

親達は又それと同様の運命を子供に遺して、その苦しい境遇から脱し得るだけの能力は与えなかつた。

彼等、哀れな農民の上に運命の神は絶大の權威けんいを持つて居るのである。泣く泣く堪えきれない不満を心に抱きながらも、暗い運命に隨うよりほか仕方はないのである。

追いかけ追いかけの貧から逃れられない哀れな老爺が、夏の八月、テラテラとした太陽に背を焼かれながら小石のまじつたやせた畠地をカチリカチリと耕して居る。其のやせた細腕が疲れるとどこともかまわず身をなげして骨だらけの胸を拡げたり、せばめたりして寝入つて仕舞う、そのわきから掘り返された土は白くホコホコに乾いて行く様子は都會の生活をするものの想像できないみじめな有様で、又東北のやせた地に耕作する小作男を見ないものには味われない、哀れな、見る者の胸さえ迫つて来る様な痛々しいものである。

斯う云う農民の住居は多く北から南へかけ東から西へと通つて居るやせ馬の背の様な形の石ころ道をはさんで両側に並んで居る。

里道の中央が高いので雨降りの水は皆両側の住居の方へ流れ下るので、家の前の、広場めいた場所の窪くぼい所だの日光のあまり差さない様な処は、いつでも、カラカラになる事は

なく、飼猫の足はいつでもこんな処で泥まびれになるのである。

小作人でも少し世襲的の財産めいたものが有るものなんかは、馬なども、たまには持つて居るけれど、その馬小屋と云うのは、四方は荒壁で馬の出入りに少しばかりをあけて菰よしを下げ、立つ事と眠る事の出来るだけのひろさほか与えられて居ないものである。

空氣の流通と、日光の直射を受ける事が無いから、土面にじかに敷いた「寝わら」だのきたないものから、「あぶ」や「蠅」は目覚ましい勢でひろがつて、飛び出そうにも出処のない昆虫はつかれて小屋に戻つて来る馬を見るとすぐその身を黒く包み去るのである。

昼は悪い道に行きなやみ、夜は、虫共に攻められる馬は、なみよりも早く老いさらばいで仕舞うのである。もし斯う云う生活さえさせられなかつたなら、この種の良い、三春馬や相馬馬はそんなに早く、みぐるしい様子にはならないだろうのに、馬までが主の小作人同様、幸でない運命を持つて居る様に思われる所以である。動物をつかつて耕作をする事のない此村には馬の数は非常に少ない。

往還で行き会う荷馬も、大方は、用事をすませれば、町方へ帰るものか、又は、村から村へと行きずりの馬である。

往還から垣もなく、見堺もなく並んで居る低い屋根は勿論「草ぶき」で性悪の鳥がらち

もなくついばんだり、長い月日の間にいつとはなし崩れたりした妙な処から茅がスベリ出して居て陰気に重い梁<sup>はり</sup>の上に乗つて居る。外匂いは都会の様に気は用いない、茶黃色い荒壁のままで落ちた処へ乾草のまるめたのを「つめ込んで」なんかある。

こんな家に二階建のはまれで皆平屋である。家の前には広場の様な処が有つて、野生の草花が咲いたり、家禽<sup>かきん</sup>などが群れて居る。

この村人の育うものは、鳥では一番に鶏、次が七面鳥、家鴨などはまれに見るもので、一軒の家に二三匹ずつ居る大小の猫は、此等の家禽を追いまわし、自分自身は犬と云う大敵を持つて居るのである。

人通りのない往還の中央に五六人きたない子がかたまつて、尾をあげ爪を磨いでうなる猫と、腹立たしそうにクワンクワンと叫ぶ犬を取り巻いて居る事がよくある。向いの家の猫が自家の鶏を取つた事から、気づくなつた家なんかも有つた。

家畜と云うほどの事もない、犬や猫に入り混つて叫んだり、罵つたりして暮す子供等は、夏は、女の子は短つかい布を腰に巻いたつくり、男の子は丸のはだかで暮すのである。けれど十四五から上のにもなれば、まさか、手拭で作つた胴ぎりの袖なしだの、黒い単衣を着てなんか居る。

冬は、母親のを縫いちぢめた、じみいなじみいな着物を着て、はげしい寒さに、鼻そこなを毒そこなわれない子供はなく皆だらしない二本棒をさげて居る。

髪は大抵、銀杏返しか桃割れだけれ共、たまに見る束髪は、東京の女の、想像以外のものである。

暗い、きたない、ごみごみした家に沢山の大小の肉塊にくかいがころがつて居るのである。

實際、肉塊が生きて居て地主のために労働して居ると云うばかりで、智的には、何の存在もみとめられて居ないのである。

けれ共此村には、彼等農民の上に立つて居ると云つても良い半農民的な生活をして居る一つかたまりの人達が居る。

それは、村役場と小学校と、めずらしくも、この村にある中学校に關係ある人達の群で有る。その他、神官と、僧侶と、この村の開墾當時から移り住んで居た、牛乳屋の家族、などは、實際の村のすべての事を処理して行く上には実力が有つた。

こんな人達の勢力は、實に「井の中の蛙」と云うのに適當なものである。

中学校がこんな村にある！ 一寸妙な氣のする事だけれ共、それは県庁が、比較的景色の好い精神的と肉体的とを兼ねたこの健康地を選えらんだと云うばかりだけれ共、その生徒

の中から此村に落される金ばかりは割合に労働なくて得られる金の唯一なものであつた。遠い村に家のある生徒は、半農民の小ぎつぱりした家へ下宿し、そのために二軒の下宿屋さえ有るのである。夏季講習が折々この村の中学で行われる時は、村中が急に、さざめき渡るのである。

それだから、彼等にとつて生徒はまことに有難いものに写るので「生徒さん」と云う名をつけて必して呼びずてにする事はしなかつた。

源平団子と云う菓子屋はいつもこの「生徒さん」達ににぎわされ、その少しさきにある、料理屋兼旅人宿は、花見時、競馬時でなければたちよる人の影もまれである。

斯んな村にも、厳な大神宮がある。檜と杉の森を背に、三番池を見下して居る。村に置くには勿体もないほどであるけれど、主だった事々が行われるにはいつも、県庁の役人が出向くのが常である。

とうに別格官幣大社になるはずではあるけれど、資産のとぼしいばかりに今も尚、幾十年かたここに建てられたと同じ位に居なければならないのであつた。

それほど差し迫った生活の味を知らない私共は、眞の貧と云う事は知らない。

精神的に慰安を受ける或る物を常に頭に置いて考えるので、金もなく、生活に苦しんで

も、不義の富をむさぼるよりは意味深いと云う事を云う。けれ共、農民が、何の慰安もなく、確信も主義もなく、只貧しく、只金がなく、冬の長い北の国に日々の生活に追われて居て考える貧と云うものに対する感じは何もないのである。只、恐ろしい、只逃れたいばかりのものである。

私共の思う貧にはいつも精神的の富みがつきまとって居る。

けれ共、物質的に精神的に貧しく金のない此等の農民の生活は實に哀れな、より所のない、一吹きの大風にもその基をくつがえされそうなものである。

(一一)

村の南北に通じた里道に沿うて、子供沢山で居て貧しい小作男の夫婦が居るあばら屋がある。

町に地主を持つて居て、その畑に働いて居るのだけれ共、段々に人数はますし、ゆとりのあるほど沢山とれる年がないので、夫婦は日の出るから暗くなるまで、畑地の泥どろにまみれて食うためにばかり働いて居るのである。

盆、正月にも、新らしい着物は作れないと云う事だ。働いても働いてもゆたかな暮しが出来ないので、幾分かすてばち気味に、少し金が入るとすぐ何かにかにつかって仕舞うので、よけい切りつめた暮しをしなければならないらしい。

私はその小作人の家のすぐの処で草を刈つて居る婆さんとその裏にぴつたりよつた処にある木の根つ子に腰を下して、膝の上に頬杖を突いて秋の初めの太陽の光に鋭く反射する鎌の先をながめながら下らない話をして居る。婆さんは此処の貧乏な事をしみじみ同情する様な口調で話してきかせた。

話をきいて私はつと家の中を見たい気になり、木の根っこから乗り出して裏口から半身を家の中へ入れる様にして中の様子を見ようとした。

三尺位の入口は往来に面し裏口は今私の居る、今は何も作つてない畑地に向つて居る。この二つの入口だけであと天窓ほかない此家の内部は屋外からのぞいた明るい眼では、なかなか見られないほど暗く陰氣である。

野菜の「すえ」た臭い<sup>にお</sup>と、屋根の梁の鶏の巣から来る臭いが入りまじつて氣味悪く鼻をつく。

暗さになれてよく見ると、五坪ばかりの土間の一隅には朽ちた「流し」と形ばかりの

「かまど」がある。

そのわきにじかに置いた水桶のまわりは絶えて乾くと云う事はないらしくしめつて不健康な土の香りとかびくささがいかにもじじむさい。

馬鈴薯と小麦、米などの少しばかりの俵は反対のすみにつみかねられて赤くなつた鍬だの鎌が、ぼろぼろになつた笠と一緒にその上にのつかつて居る。

鶏にやる瀬戸物を碎いた石ころが「ホウサンマツ」を散きらした様にキラキラした中ゴロンとだらしなくころがつて居る。

梁にある鶏の巣へ丸木の枝を「なわ」でまとめた楷子(はしき)が壁際に吊つてあつてその細かく出た枝々には拔羽(ぬけば)だの糞だのが白く、黄いろくかたまりついて、どつか暗い上方でククククと牝鶏の鳴いて居るのさえ聞える。三尺ほど高く床が張つてあつて、縁なしの踏(へり)む後からへこんで、合わせ目から虫の這い出そうなボコボコの畳が黒く八畳ほど敷いてある。燃木(たきぎ)の火花が散つてか、大小の焼つこげがお化けの眼玉の様にポカポカとあいて居る。

上り框(あががまち)に近い方に大きく切つた炉には「ほだ」がチロチロと燃えて、えがらっぽい灰色の煙が高い処をおよいで居る。畠の隅の「みかん箱」の様なものの上に、水銀のはげた鏡と、梅のとき櫛の、歯の所々かけたのがめつかちのお婆さんの様にみつともなく、き

たなくころがつて居る。

壁に張った絵紙を大方はその色さえ見分けのつかないほどにくすぶつて仕舞つて居て、片方ほか閉めてない戸棚から夜着の、汚いのがはみ出て居るわきの壁には見覚えのある高貴の御方の絵像が、黄ろく、ぼろぼろに張りついて居るのである。

家中見廻して何一つこれぞと云うほどのものもない、洞の様な、このがらんどうで、到る処に貧ひんのかげの差しただようて居るこの家の様子は私が始めて見る——斯う云う家、斯う云う生活もあるものかと思つたこの家の中に、色のやけてやせこけた、声ばかり驚くほど太い五人の子供が炉に掛つた鍋の食物の煮えるのを、この上ない熱心さで見守つて居る様子は、何となしに空恐ろしい様な気持を起させる。

私はこんな貧しい家を目前に見た事はまだ一度もなかつた。鮫ヶ橋の貧民窟は聞いて名ばかりを知つて居る。

こんな子供ばかりで居る暮しを見た事もない。私はこの家の暮しは、話できいて居るよりもひどいと思つた。

こんなにも道具がなくて暮す事が出来るのだろうか、子供ばかり置かれてどうするだろうか。

子供のためにも悪いだらうし、よく悪い者が入つて来ない事だ。  
お金なんかはどうして置くんだろう。

非常な物めずらしさで、よく見て居たいと思うともう私は婆さんの話には最早耳をかたむけなくなつて仕舞つた。

けれ共婆さんは、私が聞こうが聞くまいがかまわないと云う風に、只一人で勝手に喋つて居る。

養蚕の事を云つて居た。

實際子供等は、鍋のものの煮えるのを待ちあぐんで居るらしかつた。

こんなにも食べたく、こんなにも待ち遠がるほど三度三度の食事は、子供達の腹をみたすだけ十分でないのだろう。

育つ勢の盛なる子供達はたとえその度毎にあきあきするほど食べても、又その次の時は、前に一口も何も食べなかつた様に待ち遠がつたり、食べたがつたりするものだけれど、その度毎十分にたべて又次に待ち遠がる子供の眼は必して、今これ等の子供達が持つて居る様な眼は持つものではないのである。

何と云う熱心な、又何と云う緊張した眼の色だらう。子供等の頭の中は、鍋のもので満

ち満ちて居るに違いない。非常に、たくましい、想像力をもつてそのやがて自分等の口に入つて来るものを想つて居るに違いない。子供達はあんまり熱心になつて居るので、其の一粒さえ半粒さえ勿体ながらなければならぬ麦を俵の外から嘴を入れてあさつて居る鶏の事に気がつくものは一人もないのである。一羽の衰えた雄鳥と四羽の雌鳥は子供達の眼をかすめて、早い動作をもつて、豊かでない腹をみたして居る。人間も鶏も食物に対する饑えたものの特別に緊張した氣持で一方は一瞬の間でも早く自分等の口に煮物が入る事を望み、一方は、無意識の間に一粒でも多く食べ様とする様子で居る。

といきなり街道からかけ込んで来た、これも又あまり豊かな生活は仕得られないらしい野良犬は、はげしい勢をもつて、その狼に近づいた様な牙をむきだして鶏の群に飛びついだ。

食物に我を忘れて居た鶏共は、不意に敵の来襲をうけてどうする余地もなく、けたたましい叫びと共にバタバタと高い暗い鳥屋に逃げ上ろうとひしめき合う。あまりの羽音に「きも」を奪われたのか、犬はその後には目もくれずにじめじめした土間を嗅ぎ廻る。

この急に持ち上つた騒動に坐つて居るものは立ち上り、ねこんで居た者は体を起した。一番年上の男の子は、いきなり炉から燃えさしの木の大きな根っこを持ちあげるがいなや

声も立てず、団々だんざうらしい犬になげつけた。

犬にはあたらなかつたらしい。

けれ共、驚きのために低い叫びをあげて私の居た裏口の方へかけて来、少しの間うじうじした後、すぐ間近に居た私の足に、土を飛ばせながら畠地を彼方にこいで行つて仕舞つた。

なげ出された木の根つこは、ふてた娘の様にフウフウとはげしい煙に、あたりをぼやかして居た。

その木の始末を仕様ともしず子供達は又鍋のものに吸すいよせられて元の姿にじいつとして居るのであつた。

斯うやつて子供達の待遠しい時間は、ゆるゆると立つて漸く鍋の中から、白い湯気が立ちのぼり、グツグツと云ううれしい音がし始めて、しばらく立つと一番の兄は、ヒヨイと土間へ素足のまんま下りて「流し」に行つた。そこには、朝のままの木の「椀」がつみかさねてあり、はげたぬり箸は、ごちやごちやに入つて來た。

その椀を人数だけと箸を一本ずつ取つて「わら」で一拭したまんま畳の上へ上つて仕舞つた。

私はわきで草を刈つて居る婆さんに声を掛けた。

「ねえ、お婆さん、  
どこの子供でも、あんなにはだしで上つたり、下りたりして居るの？ 誰も叱り手がないんだろうか。

「なあにねえ、お前様、桑の価は下り一方だかんない。駒屋の親父とつさまあ家の畠土はたけは、一度も手がつかねえほどなんだし

婆さんは、桑の相場をきいたと思つて居るのだ。

私は笑うともなく唇をきゅつとまげて又子供等の方に又目をやつて居た。

丁度その時、大きい兄は弟や妹達に、鍋の中からホコホコに湯気の立つ薯を一つずつわけ始めて居る。

兄弟中で一番年嵩で、又、一番悪智恵にも長けて居る兄は、皆の顔を一順見渡してから、弟達に一つやる間に非常な速さで、自分の中に一つだけ余計に投げ込む。けれ共、その細い、やせた体の神経の有りとあらゆるもの、鍋の中に行き来する箸の先に集めて居る小さい者達は、どうして兄の腹立たしい「たくらみ」を見逃すことが有ろう。

子供達の心は、忽ちの内たちまちに兄に対する憎しみの心で満ち満ちたものと見え、一番氣の強

そうな、額の大きな子が、とがつた声で、  
 「兄にい、己にもよ。  
 と云つた。

一番の兄は、自分の失敗に険しい目をして弟共をにらみながら次から次と出す椀の中に  
 なげたけれ共額の大きな子はまだきかない。

「お前の方が、ふとつてらあ。

と云つて兄の膝の前の椀からその太つた円い一片まるいを箸の先に刺そつとした。

いきなり、子供の頬に、かたい平手が飛んで、見て居る者の耳がキーンと云うほどいや  
 な音をたてた。

斯うして小さい人間共の争いは起つて仕舞つた。年上のものは力にまかせて小さいものを打つたり、突き飛ばしたり、小突いたりして、一言も声はたてず、いかにも自信の有るらしい様子をして小さいものに向つて居る。

兄弟の中半分が叫びつかれ、泣きつかれた時、いつとはなしに「喧嘩」はやんでは仕舞つた。一人が先ず始めて皆がそれにつれられて働き出した「喧嘩」は一人がいやになると皆もいつとはなしにする気がなくなつて仕舞うものである。

各々が思い思いの処に立つて、夢からさめたばかりの様に気抜けのした、手持ちぶさたな顔をして、今まで自分等のさわいで居た処を見て始めて、折角盛り分けた薯の椀の或るものはひっくりかえり、いつの間にか上つた鶏が熱つそうに、あつちころがし、こつちへころがし仕てこぼれた薯を突ついて居る。斯う云う、何とはなし重苦るしい手持ぶ沙汰、間の悪い沈黙を破つたのは、一番きかなかつた額の大きな子であつた。

「己おれく食うべえ。

一人何か仕だすと子供等は皆木の椀を取りあげて勝手にてんでんばらばらの方を向いて、或る者はしゃくりあげながら、或るものは爪でひつかかれた蜩みみずばかりをながめながら、味もそつけもない様に、ボソボソと食べ始めた。

私のわきで婆さんも見て居たものと見えて、

「あないにして食うても、美味うまかんべえかなあ。何も彼も餓鬼等の中うちがいっちはえわ、  
なあ、お前様。

お前様みたいな方は、若いうちも年取りなつても同じなんべえけど、己等みたいなものは、婆ばばになつたらはあ、もうこれだ、これだ。と変な笑い方をして手を左右に振つた。

けれ共、この婆には、実の子が二人もあつて皆男で今は村で百姓をして居るのだから、こんな草刈をたのまれたり、人の水仕事を手伝つたりしないで、かかり息子の家で孫の守りでも仕て居たらすみそとに思えた。

「お婆さん。何故、むすこ息子の処へ居ないんだい。

私は、かなり曲つた腰と、鎌を石でこすつて居る、今にもポキーンと骨のはなれそうにかさかさの手をながめながら云つた。

「はい、お前様、うちの息子は皆正直ものでなし、けれど、此村の風ふうで、自分の持ち畠とか田がなけりやあ、働く間うち、働くのがあたり前になつとるでない。

此の婆が、生れは越後のかなり良い処で片附かたづいてからの不幸つづきで、こんな淋しい村に、頼りない生活をして居るのだと云う事をきいて居るので、その荒びた声にも日にやけた頸筋きのじんのあたりにも、どことなし、昔の面影が残つて居る様で、若し幸運ばかり続いて昔の旧家きゅうかがそのまま越後でしつかりして居たら、今頃私なんかに「お婆さんお婆さん」と呼ばれたり、僅かばかりの恵に、私を良い娘だなんかとは云わなかつただろうなんかと思えた。

松の木の根元にころがして置いた「負籠おいかご」に刈りためた草を押し込むと、鎌をそのわ

きに差し込んで、

「甚助がさあ行つて見ますべい。

と云うので、私も物珍らしい顔をして後から附<sup>つい</sup>て歩いた。その時まで、私は甚助つて云う百姓の家はどれだか知らなかつた。けれ共、それはすぐそこに裏口のある、私が先刻<sup>さつき</sup>つから見つづけて居た子供ばかりの家であつた。遠慮もなく入つて行く婆の後から、自分も中に入つて、今まであすこで見て居たより、もつとひどい様子にびっくりした。

さつきは満足な畳だと思って見たのは「薄縁<sup>うすべり</sup>」とも「畳」ともつかないもので「わら」の床<sup>とこ</sup>のある処もあり、ない処もある非常にでこぼこした見るから哀れなもので、畳ばかりではなく床までベコベコになつて居た。

婆は一番年上の男の子に、

「父は？」

「母は？」

と云つてききながら上り框に腰をかけて炉のほどで煙草を吸つたりした。

一人の子の前がはだけて膝つ子僧が出て居るのを祖母がしてやる様に、しづかに可愛がつて居るらしくなおしてやりながら、

「お前さま、今まで、こんなむさい家は見なすった事がなかつべい。

と云つて大きな声で笑つた。

私の見なれない着物の着振り、歩きつきに子供等は余程変な気持になつたと見えて、誰一人口を利くものがなくて、只じろじろと私ばかりを見て居る。

それをわきで見ながら婆さんは、

「ひよろしがつて居ますんだ（恥かしがつて居るのだ）。

と云う。

私は、田舎の子の眼に見つめられる事にはなれつ子になつて居たので格別間が悪いとも思わなかつた。

「父さんや、母さんは？

淋しいだろう？

とやさしい軽い笑をただよわせながら、一番大きい男の子に云つた。

土間に下りて、私を後の方から見て居た子はいきなり大きな声で、

「ワーッ

と笑つた。

私は少しいやな気持になつた。けれ共、再び、「ねえ、淋しいだろう。

と云つた時、

「お前の世話にはなんねえからなつし。  
と怒叱られた時ほどいやな気持にはならなかつた。先ず、あんまりの返事に私は男の子の顔を見た。上り框の婆さんの傍に立つて私を見下して恐ろしい顔をして怒叱つたのであつた。

私より婆さんの方がなお驚いたらしかつた。その児の方を振向くと一緒に手を引つ張りながら、

「何云うだ。そないな事云うものでねえぞ。  
と云つた。

私の心中には、一種の「あわれみ」と恥かしい様な氣持が湧き上つたのであつた。

私は、ほんとうに只、親切の心から云つた言葉をこんな荒々しい言葉で返され様とは夢にも思つて居なかつた。見なれない年若な女が自分達の家へいきなり入つてきて、淋しいだろうの

何のと云うので年上の子は何か誤解したのであつたろう。他人の親切を、親切として受け入れる事の出来ない子達だと思うといかにも「みじめ」な気持にもなるけれ共、私の掛けた親切な言葉は、今まで、今の様な言葉で受けられた事がないので、いかにも氣の小さい、氣はすかしい様な気持にもなつた。

私は微笑する事も出来ない様に婆さんの顔を見た。

「礼儀も何も、知んねえからなつし

と取りなし顔に云いながら、立ちあがつた。家の中の事に気を配りながら出るあとについて私も一緒に往還の方へ出ると、そこから杉並木の様な処を透して真直に見えて居る祖母の家へ足を向けながら、婆さんに、

「晩にでも遊びにお出。

と云いすぎて只つた一人足元を見ながら、沈んだ、重い気持で、静かに歩いて居ると小石がひどい勢で飛んで来て、私のすぐ足元で白いほこりをあげ、わきの叢くさむらにころげ込んで仕舞つた。

私は本能的にすばやく身をよけてすぐ後を振向くとまだ二三間ほかはなれて居ない甚助の家の入口の家中の子供が皆重なりあつて此方をのぞき、私に怒叱どなつた一番大きな子は、

次の石を拾おうとして腰をかがめて往還に立つて居た。

私は、鋭い勢で飛んで来た小石が、袴の着物を通して体にあたる痛さや、素足から血のにじんで居る様子を男の子の態度を見た瞬間に想うともなく想つた。

男の子が投げる事をやめる様にわきにある杭の木を小楯に取つて、じいつとその方を見つめて居た。

体は静かに、眼は静かに、子供の上にそそがれてあるけれども、今までに経験したことのない不安な気持は、私の頭中かけ廻つて、あの小石が男の子の手をはなれるやいなや身をよける用意さえして居た。私はいつまでもじいっと彼方を見て居た。

彼方も又、私におどらないほど、此方を見つめて居る。けれども、とうとう二度目の石はそのまま男の子の足元にすてられ、皆家へ入つて仕舞つた。

それを見ますと急に私は、頭の頂上で動悸どうきがして居る様な気がした。

それからすぐの家の門へ入るまで私は、まるで駆けると同じ様な速さで、何も考へるいとまもなく急いそいだ。祖母の顔を見るとすぐ、

「甚助の家の児達は、ほんとうに、いやな児だ！」

と云つたつきり縁側に腰をかけて仕舞つた。口に云われない安心が切り下げる祖母の姿と、

さつぱりときれいなあたりの様子から湧き出て私の心に入つて行つた。

私は何の不幸も知らない、世の中はいつでも親切なつもりの言葉は、親切な様に、情深い話はその様にばかり聞かれるものの様な気がして居る。

又、それが、必してそなばかりではないのも知つて居ながら、實際、自分の親切な言葉をああした調子に返され、その上、後から小石まで投げつけられ様とは何だか不思議な様な気がした。

人にねらわれた事のない私、ああやつて、形に表われた様な事で小石の的にされた事などない私はどんなに氣味悪く思つただろう。私は甚助の子供の氣持より、はるかに単純で臆病なのを知るのであつた。

彼の子供達は、私の親切な言葉のかげに何か、たくらみのあることを想像したのだろう。その体の良い仮面をかぶつた悪いたくらみを深入りさせないうちに追いはらおうとしたのであろう。

私は、ちよんびりも、そう云う氣持は持つて居なかつたけれど、彼等が生れるとから、両親が町の地主にいじめられ、いろいろの体のいい「罷」に掛けられた事を小さいながら知り、それ等の憎むべき敵は皆自分達より良い着物を着、好い食物をたべて、自分達の使

わないので言葉を使つて居ると云う事の記憶から、私をそれと同様のものにみなしたのであつたろう。子供達が悪いのでもないだらうし、親が悪いのでもないだらう。只生活の苦しみが子供達までそんな悲しい氣持にさせて仕舞つたのである。

その根元から覆して、世の外へ投げやりたい生活の苦しみは、いつの世にあっても、人間が生活をして居る間は絶えない事であるのを思えば、生活の苦しみに打ち勝ち得る智力とそれにともなう肉体を持たないこの子供等と同じ様な氣持の人が幾百人、幾万人、また無窮にこの世に生れては死し、死しては生れしなければならないだらうと云う事も思うのである。親切を親切としてうけ入れられない事のある世の中、それは実に悲しいことである。この様な、世に出てから時の少しほか立たない私でさえ、生活の苦しみを少しも感じた事のない私でさえ、どうしても受け入れる事の出来ない裏書のある親切に会う事はかなり度々である。

子供達から云えば、私は眞の路傍の人である、あかの他人である。いきなり入つてやさしい言葉をかけたのを妙に思うのは無理ではない。けれ共、眞の親切を、装うた親切と見分ける眼をふさいで仕舞つた、子供心に染み染みと喰い込んだ生活の苦しみと、町の地主等を憎く思うのである。私は斯うやつて長い事考え込んで居た。

家の小作人の菊太きくたと云う男が私のわきに来て、

「良いお日和でござりやす。

と低い声で呼びかけるまで、甚助の児がなげた石が足にあたつて、そこが、うずきでもする様に、苦しい、さわると飛び上るほど、痛い様な気持で居た。

### (三)

菊太きくたは願い事が有つて來たのであつた。

新米の収穫が始ると、菊太は来るものにきまつて居ると祖母達は云つて居る。毎年毎年欠かさず、拾時分になると一二里あるはなれた村からこの家まで來るのであつた。

いかにも貧乏しそうな、不活潑な、生氣のない、青黒い顔をして居て、地蔵眉の下にトロンとした細い眼は性質の愚鈍なのをよく表わして居る。

こんな農民だとか、土方どかたなどと云う労働者によく見る様な、あの細い髪がチリチリと巻かつて、頭の地を包み、何となく粗野な、惨酷な様な感じを与える頭の形恰をこの男は持つて居るけれど、不思議な事には心はまるで反対である。

紺無地の腰きりの筒つぼを着てフランネルの股引ももひきをはいて草鞋ばきで、縁側に腰をかけて居る。紺無地の筒つぼと云えば好い様だけれ共、汗と塵で白っぽくなり、襟は有るかないか分らないほどくしゃくしやに折れ込んで、太い頸にからみついて居る。袖口は切れて切れて切れぬいて、大変長さがつまつて仕舞つて毛むくじやらの腕がニュツと出、浅く切つた馬乗は余程無理をすると見えて、ひどいほころびになつてバカバカして居る。股引だつて膝の処は穴があいて居るし、何と云う無精な女房なんだろうとさえ思われる。

祖母は此の男に会う事をすいては居ない。

けれ共この家一さい一人手で切り盛りして居るのでいやでも恋でも、会わせられるのであつた。きら厭われるのは願い事がきまつて居るからもあるし、それにあんまり愚痴つぽいからでもあつた。

願い事——ほんとにそれは幾年も幾年も前から同じ願い事ばかりこの男は持つて居た。小作男の願事と云えば云わざと知れた、米をまけて呉れである。

此男は、いつもいつもその願い事をもつて裕時分にはきっと来、来るたんびに皆に嫌われながらも自分の望をかなえて行く、馬鹿の様で馬鹿でない男であつた。

此の男のあずかつて居た田は、そんなに悪い地ではないらしい。

他の小作男に見つめられても、小作米だけは不作でも十分あがる面積と質を持つて居た。けれども共どうしたものか、毎年上るべきものが上らない。納めるものを納めないで自由な暮しをして居るかと思えばそうでもなく、甚助の家よりもつと酷いと云う話を聞いて居る。行つて見た事もないから、どうしてそんな事になるのか分りもしないけれども、毎日毎日働いて居るのに取れる筈の米の取れないのは私達では不思議に思える。

地主と小作人などはお互に都合の良い様に仕合つてうまく行きそうに思えるけれども、實際は、なかなかそろは行かず、丁度、資本主と職工の様に絶えず不平と反抗的な気持が混じつて居る。

私は菊太の顔をみるとすぐ自分等が、菊太の子供達がいやがつて居る地主だと云う感じが電の様に速く胸を横ぎつて、たまらなく不愉快な、いやあな気持になつた。

何も、地主だから罪人だと何とか云うのではないけれど、其の日は甚助の家の子供を見て來たので訳もなくいやな気持がしたのである。

菊太の家の子供達も、あんなにして暮して居るのだろう。

私達が行つたらどんな顔をするだろう。

斯うした、貧しい、この頃の様に不作づきの年では余計地主と小作人の感情の行き違

いが多いのである。

私はだまつて菊太の話を聞こうとした。

菊太は何でもない様なポカンとした顔をしてボソボソと低い声ではなす。

「御隠居様、

今年も亦思う通り実りがありませんない。

斯うして話は始まりいつはてしがつくかと思うほど長く長くつづくのである。

菊太の出来るだけの弁舌を振つて、彼方此方あつちこつち、実入みいりの悪かつた田の例をあげる。

処は何処で、何と云う名の小作人の田では去年の三ヶ一ほか上らなかつたとか、誰それの稻は無駄花ばつかりでねたのは少しほかなかつたとか、そう云う事をあきるほど云いつくしてから、

「けど、己おのの田はいい方なんだつし、

御年貢だけはありやすかんない。

と云うのである。

それを云うまでも口がよくもとらないのでどもつたり、「ウゥーウ」と云つたりする間と、茶を飲み、煙草を吸う時間が加わるので、それだけでもう、大抵の人間は聞き疲れ

て仕舞う。

大きな声で話すのならそうでもないだろうけれど、低い低い声でうめく様に云うのだから、聴くものの気がめ入る様に陰気になつて来る。

それが此の男のねらい処である。自分が、口がうまく廻らない話下手だと知つてからは、いつでも聞手の泣きそうになるまで、クドクドと何か云つてききあきて五月蠅うるさくなつて来るのを見すまして本意を吐くのが常であつた。

祖母はもうききあきて来る。

始めの中うちは煙草の火などを出してやつた下女も、もう前の庭で草の手入を始め、祖母も聞いて居ない様な顔をして「くるみ」を破わつては小さいかごにためて居る。只、今の処は私ばかりが菊太の忠実な聞手である。菊太をつくづく見たいばつかり、知りたいばつかりに私は一言も口は利かないながら、わきに座つて居る。

話そうと思つた事をあらまし話して仕舞うと、次に話す事を考えてもする様に、体に合わせて何だか小さい様に見える頭を下げて、前歯で「きせる」を不味まづそうにカシカシかみながら、黙り込んで居る。

百姓などで、東京のものの様に次から次へと考えずに話をするものが有つたら、それは

大抵善い方に利口ではないものである。

他人の事を悪し様に云い、一寸したものちよろまかさない位の農民は、大抵この男の様な様子をして話すものである。

菊太は沈黙の間に話の順序を組たてるのである。出来るだけ哀れっぽく、哀願的に聞える様に苦心するのである。

考えて居る間も、他の百姓の様に、故意わざとらしい吐息といきをついたり、悲しい顔付をして見せるでもなく、只、ボンヤリ気抜けの仕た様に考え込んで仕舞うのである。自分の満足した考えを得るまで必して口を切らない。そんな時には、益々頬のたるみが目につき、小さい眼は倍もショボショボになつて居るのである。

しばらくだまつて居たつけがやがて頭をあげて、小さい庖丁をつかつて居る祖母の手許を見ながら云い出した。

「御隠居様、

御年貢の分だけは、はあどうにか斯うにか取りましただハイ。

それは確なことでやす。

けんど貧亡者は、いつでも貧亡でなし、

御年貢は取れてもは、去年の鬼奴おにめがまだついてやすでな。

祖母はだまつて居る。

鶏も鳴かない静かな中にパチンパチンと乾いた「くるみ」のからの破れる音が澄んで響いて居る。

菊太は私を見た眼をすぐ祖母にうつして又云い続ける。

「去年は草取頃に、婆様にはあ逝かれて、米と桶の錢を島の伯父家おじげに借りさあ行つて事うすましやした。悪い時にやあ悪い事べえ続くもんで、その秋にや娘つ子が死にやしたかんない。

今年は今年で、お鳥（女房の名）が指さあ、張れもの出来はでかして、岩佐様しまおじげさあ七十日がな通いましただ。

鎌で切つた処さあ悪いものが入つたそうで、切つて二針三針縫つて膏薬くれたばかりで御隠居様、有りもしねえ錢十両がな取られやした。

少し金があればはれもの出来したり、不幸が続いたりしやして、島の伯父家おじげにも、お鳥さとが実家さとさも、不義理がかさみやす。確かに御年貢だけは取れやした。

けんど、岩佐様ぜにねさあやる錢が無えで去年の麦と蕎麦粉を売りやしたで、もう口あけた

米一俵しか有りましねえで……

御隠居様、ほんに相すまねえでやすが一俵だけまけてやつて下さりませ。  
来年は、どうでもして返しやすかんなない、御隠居様。

此事以外菊太の云う事はないのである。

幾度繰り返しても只この中の一つ二つの言葉をかえる許りだけれ共、どんな事が有つて  
も、「七十日」と「十円」を抜かす様な事は決して決して金輪際無いのである。何の抑  
揚もなく、丁度生暖なまぬるい葛湯を飲む様に只妙にネバネバする声と言葉で、三度も四度も繰  
かえされてはどんな辛棒の良いものでもその人が無神経でない限り腹を立てるに違ひない。  
斯うなると、菊太と祖母は只根こんくらべである。つまる処は根の強い菊太がいつもいつも  
うま甘い事になつて仕舞うのが常である。

祖母は、自分の聞きともない願事に、なるたけ氣を腐らせまいと絶えず手か体を動かし  
て居る。「くるみ」を破り切つたので、今度は茶を出して美濃紙で張つた「ほいろ」の様  
なものを、炉の上にのせた中にあけ火を喰わせ始めた。

折々手にすくいあげて少しづつこぼして工合を見る。ザラザラ……ザラザラ……と云う  
音にしばらくは菊太の低い声もかき乱されるけれど、自信のある菊太はなお話しつづけ、

その音が止んだ時には又、ききともないその願事が、はてしもない様に続いていや応なしに耳に入るのである。

煙草の火が消え、茶にさす湯が冷つこくなつても菊太はやめ様としない。

到々祖母は根まけが仕出す。

「お前のまけて呉れまけて呉れには、ほんとうにいやになる。いつになつたらそんな事を云うのを止めるんだろう。毎年毎年御前がいやな事をきかせない年はないじやないか。あんまり不作で御前の手に負えない様なら、もう田を作るのをやめてもらおう。

いやな顔をして祖母が斯う云い出すと菊太は少し力づいた調子で又繰返すのである。

祖母は若い時処々を歩いたのでいろいろな言葉を使う。けれ共小作人を叱る時、商人の悪いのを怒る時はきっと東京弁を使つた。

ここいらでは東京弁を使う人には一種異つた感じを持つ様な調子の村なので句切り句切りのはつきりした少し荒い様な東京弁は、小作人などの耳には、妙に更まる氣持を起させるのであつた。

「来年きつとなすなすと云つて今までに十五俵も貸してあるじやないかねえ。

あの上積つては、とうてい返せるものではないにきまつて居る。そんな馬鹿な事は出

来ない。いくら私が年寄りでも斯うして居るからには踏みつけられては居られ無い。

祖母はいろいろと強い事を云う。

田地を取りあげるとか、返せなかつた時にはどうするとか云うけれど、菊太は只、哀願を続けるばかりである。

私は、祖母の意地の悪い、菊太を眼下に見る様な様子を見ると菊太の子供等がこれを見た時の気持を想像した。

自分の父親は、女年寄の前に頭を下げてたのんで居ると相手は、つけつけと取り合はない様にして居るのを見たら、訳もなく、女は己おれより目下なもの、弱いものと云う感じを持つて居る子供等は、どんなにくらしい気持になるだろう。私は菊太の男の子に十三より上のがないと云うのが何だか心安い。他人ひとが聞いたら笑う事に違いない。

あんまり空想的な事だとは思うけれど、両親の苦しめられると思う心がつのつて小作の十八九の無分別な児こが、鎌を持つて待ちぶせたと云う事を聞いた事を思い出すと、何だかそんな気になるのである。

他人ひとの身ばかりではなく自分自身にも、甚助の児が小くてよかつたと思つて居るのである。

祖母は次の間に入つて暫く箪笥の引出しを開けたりしめたりして居たが、出て来た時は手に帳面を持つて居た。

帳面を始めつから繰つて見て渋い渋い顔をした祖母は、

「今度で十六俵だよ。

と云いながら、何とはなし重々しい様子で菊太の前に箱すずりとその帳面を置いた。

菊太は幾度も幾度も頭をさげて、乾いた筆の先を歯でつぶしてうすい墨を少しつけて蚯蚓みづの様な、消え消えな字をのたくらせて井出菊太と書いた下へ拇指を墨につけて印変りにする。

その間、祖母は一言もきかず、菊太の前にしゃがんでのろのろと動く手先から、まつ黒になつた指を腰の手拭にこすりつけるまで見つめて居る。

書き終えて祖母の前に出すと一通り見てから、

「良い眼でよく見て御呉れ。

と私に渡す。進まない様に手をのばして遠くの方で見て「いいでしよう」と云つて祖母に返すと、すぐ元の場処に仕舞いに行く。

菊太は、自分の希を叶えてもらつた嬉しさに何となく輝いた顔になつて、身軽に立つて

女中に消えた火をなおしてもらつたり、茶をつぎなおしたりする。

祖母は気の毒なほどいやな顔をして炉の四辺にまわりに艶<sup>つや</sup>ぶきんをゆるゆるとかけたり、あつちこつちから来た封筒を二つに割つて手拭反古を作つたりして菊太の帰つて呉れるのを待つて居る。

あきるほど茶をのみ、煙草をふかしてから、

「御暇<sup>おひとま</sup>いたしますべえか、

ほんとに有難うござりました。

来年はきつとなしますかんない。

お鳥もはあ、さぞ喜びますべえて、

お嬢様もはあ、有難うござりやした。

と腰をあげる。腰を塵を取る様にパタパタと叩き三つ四つ頭をさげて土間の女中にまで何か云つて庭の入口の竹垣に引っかけて置いた、裾の切れた、ボタンもない黒ラシャの茶色になつた外套のお化けの様なものをバアツとはおつて素頭でテクテクと歩いて行く。

中高な門内の道を出ると菊太はチヨイと振り返つて草の両側に生えて居る道を、ポコポコと小さいほこりの煙をたてて帰つて行く。

甚助の家の方へ曲る頃、祖母はありつたけのくさくさを私に打ちあける。

やさしく仕て居ればつけ上り、きびしくすればろくな事を仕ず、小作人なんかはしみじみ使いたくないものだと云う。菊太の女房はこの上なしのだらしなしやで、針もろくに持てず、甲斐性のない女だと女中まで、くさいものが前に有る様な顔を仕て話してきかせる。

「菊太爺さんもするい爺様ですな」。

いつもいつも、どうにかして無理を通して行く。御隠居様も今度は、どうしても許してやんなりやあ、いいですつペ。

女中がこんな事を云つても、

「ああほんとうにそうだよ。

と云つたぎりその日一日祖母は、菊太の声と顔付とを眼先に浮べていやな思をするのである。

夜、湯に入りに来た構内かまえの家を貸りて居る小学の校長をつかまえてまで今日の菊太の事を話した。

「どうもなかなかうまくは行かんもんですてね。

と云いは云つたが、菊太をけなすでも祖母に味方するでもなく氣のない顔をして、飯坂の

力餅をもじやもじやの鬚の中へ投げ込んで、やがて「お寝み」と云つて帰つて仕舞つた。

「ほんとうに小作男なんか使うのが間違いだ。ああ、ああ、けっぱいけっぱい。

床に入つてまで祖母はつぶやいて居た。よっぽどいやだと見える、気の毒な。

田地の事、作物の事、小作男の不平やら、思わしい収穫を得ない田畠の物などの話は聞いても、それは只、話す人の氣休めのために話すので私に相談する事はない、私の聞いても喜ばない事は聞かずに居られる、幸福な事だ。

一儀まけてくれ、と菊太が願うのは祖母に向つてで私にではないけれど、やつぱり祖母が思うと同じ様に、そんなに御意ぎよいなり放題にして居てはいけない、と思う。

何故そんなに、いつもいつもきつぱり出来ないんだろう、と思う。

今までが菊太に対してあんまり良い気持は持たない。私と同じ様に、女中だつてやつぱり何となし、変な男だ位には思つて居るにきまつて居る。

祖母が、菊太の話を聞くのがいやで連れられて、私達まで何だか知らんが菊太は意くじのない男だと思う。斯んな様にして、家内の人数が多くれば多いほど、何だかいけすかない小作だ、と思う氣持が大きくなつて、男の氣の早いのや息子でも居るといふ云わざとも良い事まで云い、「ひやかし」の一つも云う様になつてますます両方の間が不味まずくなるの

であろう。

祖母は、「私はもうこの年になつて、小作男を泣かせても氣持の悪いばかりだから、盆、暮に金をやるのを一度にやつたと思つて居るのさ」と云つて居るから両方で荒い声なんか出す事は決してなかつた。けれど、どうしても願い通りにしてやればつけ上の氣味がある。どうしたら小作がうまく上り、地主との氣持が円く行くかと云う事は、よく考えるけれど共分らない。

一番、小作をさせないのが良いのだろうけれど、資産のない、他人の田を働いて生活して居る者は、それを取りあげられたら、この上なくひどい目に会う事になるからこまるし、又地主にした処で小作をさせなければ、家に下男を置いて作らせなければならない。それも、借すほどの田を一人では仕限しきれないから小作をさせるより却つて手間と費用がかかるわけになる。

小作男と地主とはどうしてもなれられないものの様である。何にしろ、一方は取る方で一方は取られる方である。恐らく、年に二度収穫のある土地でも小作男はなろう事なら、一二俵はまけて慾しくて居るだろう。

ほんとに何かうまい事が工夫されないと困ると思う。

## (四)

随分と骨に通る様に寒い風が吹く。

家中で一番遅く起きた私は寝間着の上に、黒っぽい赤い裏の「どてら」みたいなものを着て、不精に手を袖の中にしつかりと包んで、台所の炉のわきに女中が湯をわかして呉れるのを待つて居た。木の枝に火がついて立つ煙が目にしみてしみてたまらないので、

「こんな煙っぽくっては眼に悪いねえ。

と女中を見ると、崩れた薪をなおすために煙のまつただ中に首を突込んで何かして居る。こもつた様な声で、

「赤坊<sup>や</sup>の時から、煙の中で乳すうて居ますだもの。眼が馬鹿になつて居ますのだ。寒い朝です<sup>や</sup>ない。風邪<sup>かぜ</sup>引きなさいますよ。

若い女中は、私の横顔を何か、さがし物でもする様に隅から隅まで見て居る。

「大丈夫だよ。今年は、冬が早く来る様だねえ。

と云つて居ると土間の処で、

「お寒うござりやす。」

と中年の女の声がする。女中が座つたまま、  
「誰だい？」

と云うと、

「己だが。

と云う。

「ああ、甚助さん家のおつかあか、お上げ上んなね。

「畠さいぐ行のよ、東京のお嬢様いらつしやるけえ、ちよつくら呼んで来ておくんなね。

女中はチラツと私の顔を見て、

「お起きんなつたばつかりだによ、着物でも着換えてからいらつしやるだべ。

と云つて茶を入れ始めた。

「何にしに来たんだろう。

と思ひながら大いそぎで着換えて土間の処へ行くと、鍬をわきにころがして、もじやもじやの頭をして胸をダブダブにはだけた四十近い様な女が立つて居る。私の顔を見ると急に腰をまげて、

「お早うござりやす。昨日は、はあ家の餓鬼奴等が飛んでもないことをいたしやつたそうでなし、御わびに来ましただ。

と云う。漸くわけが分つた。

「わざわざ来なくつたつていいのに、どこの子供だつて悪戯はするもの怒つてなんか居るものかね、お前子供を叱つたろう、ほんとうにかまいやしない、大丈夫だよ。と云つてやると、女は気安そうに笑いをうかべながら、

「お前様、今朝ね、お繁婆さんが来やしてない町さ行くが買物はねえかつてききながら昨日の事云いやしたのえ。一寸も知りましねえでない。御無礼致しやした。<sup>お</sup>己ら家の餓鬼奴等も亦何つちゅうだつペ、折角、ねんごろにきいてくれるにさあ石なげるたあ。此こ間だも——」

と村校友達となぐり合を始めて相手に鼻血を出させたが、元はと云えればブランコの順番からで夜まで家へ帰されなかつたと話して聞かせた。

「御免なして下さりませ、ほんに物の分らん児だちゅうたら。

「かまいやしないよ、子供の事だもの。

女中もいつの間にか後に立つて、

「ほんに彼の児は気が強え児だかんない。

と云つて居る。じきに女は帰つて仕舞つた。女中は湯を「金だらい」にあけながら、

「頂戴物が減るのを気づかつて来やしたのし。

と笑つて居た。

女中は祖母にその事を見た様に話して居る。

祖母に、たのまれた用事があるので、じき近處の牛乳屋へ行く。此村に只一軒の店で昔から住んで居るので実力のある家だ。

四五年前に病氣が流行った時に数多の牛を失つたので、今は元に戻すにせわしくして居る。兄弟で一家に居て同じ仕事を共同にして居る。兄はどつちかと云えば小柄な、四角張つた顔の中に小さい眼と低い鼻と両端の下つた様な口をして居る。髪を少し長目に刈つてクキンクキンとした眉の下からその小さい眼がすばしつこく働き、上眼で人を見る癖がある人だ。見かけは小細工の上手そうな男に見えるけれど、内心はそうではないらしい。村會議員の選挙、その他重だつた事にはなくてはならない人になつて居る。

召使より早く起き日の出ないうちに外廻りを掃いてから、乳搾りやその他のものを起すと云う事は知らぬ者がなく、働き手で通つて居る。体も骨太に思い切つて大きく眼の大き

い眉の太い弟の方は兄より見かけが良い。兄よりは熱のある顔つきをして居るけれど共深い事は知らない。

荷馬車の轍の深い溝について居る田舎道を下り氣味に真直に行つて茨垣の中に小さく開いて居る裏門から入つて行く。

左側の小屋の乾草を小さい男の子が倍も体より大きい熊手で搔き出して居る。

牛はまだ出て居ない。午前中は出さないものと見える。狭い土面をきちきちに建ててある牛舎には一杯牛が居る。私の幼い時から深い馴染のある、あの何だか暖つたかい刺激性の香りが外まであふれて居る。

退屈な乳牛共が板敷をコトコト踏みならす音や、ブブブブと鼻を鳴らすの、乾草を刃物で切る様な響をたてて喰べて居るのなどが入りまじつて、静かな様な、やかましい様な音をたてて居る。

わきに少しはなれて子牛と母牛を入れてある処がある。乳臭い声で「ミミミミ」と甘える声や、可哀くてたまらない様にそれに答える母牛の声が私までが良い気持になる様にひびいて隙間から、草を口うつしに喰べさせて居るのが見える。

牛舎の中へ入つて行く、馴れない故で牛の鼻柱の前を通りるのはあんまり良い気持はしな

いけれ共、静かに草をかんで居る様子は、どうしても馬よりはなつきやすい気持を起させる。ズーツと中に入ると消毒した後の道具を拭いたり、油をさしたりして居る男達が五六人居る。田舎の牛乳屋にしては道具でも設備でもがよく整つて居ると思つて見る。

主屋に行くと誰も見えない。真黒いミノルカとレグホンが六七羽のんきにブラついて居る。中を一寸のぞいたけれど共人影が見えないので誰かにきいて見ようと思つて又牛舎の方へ行きかけると、裏の方から、主婦が出て来た。

「まあいらつしやいまし。よっぽどお寒うございますねえ、お上りなさいまし。と氣味よく云う。

自分で結う丸髷をきれいに光らせて縞の筒袖の上から黒無地の「モンペ」をはいて居る。草鞋を履いてでも居そうなのに、白足袋に草履(ぞうり)があんまり上品すぎる。

足の方を見ると、神社の月掛けを集めて廻る男の様な気がする。年の割にしては小綺麗に見える人だ。二夫婦一緒に居るのだから気がねが多いと云つて居る。いそがしそうだから立つたまま用向を云つて今留守な主人が帰つたら伝えて呉れと云つて置く。

お上んなさいお上んなさいと進められてもいそがしそうだからと云つてかえりかけてる処へ大きな包をしょつてお繁婆が来た。買物をたのんだと見える。

しゃぼんだの足袋だの砂糖だのをならべる。

「こんなものまで町でなければありませんのですからねえ。と云つて居る。

足袋が目立つて不恰好だ。

砂糖が二銭上つたと云いながら黄色い大黒のついた財布を出して少し震える手で小銭をかぞえて縁側にならべる。しゃぼんを一銭まけさせたと手柄顔に話す。

帰る時にミノルカが生んだのだと云う七面鳥の卵ほど大きい卵を二つくれた。東京ではとうてい見たとも見られるものではない。大いそぎで勘定をすませたお繁婆は私のあとから追掛けて来て、

「御邪魔になりやすつべ。

と云う。

疲れた様な足つきの婆さんに中央<sup>まんなか</sup>を歩かせて私はわきの草中を行く。

甚助の家へ今朝よつたから昨日のことを話した。御詫びに行くと云つて居たがほんとに行つたか、なんかと云う。

子供のことを一々そんなにとがめだて仕ずとも良い。私は何とも思つて居ないんだから

と云うと、

「何そんな事がありますべ、人がねんごろに問うてやるに石投げるなんちや此上ねえ悪い事なんだつし。

腹を立てた様に太い声を出して云うのである。後生願いの良い婆さんだから私に、本願寺にお参りさせて呉れると云う。案内して呉れと云うのか私の金で連れて行つてくれと云うのか分らない。

一つ二つ短かい距離みぢのりを行く間に「あみださま」に関した話をして聞かせた。

あんまり御漸詰めいて居るので笑いたい様な顔をすると、

「学問の御ありなさるお前様方にやあ可笑しかんべえけど私達は有難がつて居りますのさ。

といやな顔をする。見かけによらない話を沢山知つて居る婆さんだ。

祖母は年柄ではさぞ信心っぽい人の様だけれ共案外で別に之と云う宗教も持つて居ないので、私達のところへ来ると熱心に「あみださま」の講釈をする。

口振りでは、彼の世に、地獄と極楽の有る事を信じて居るらしい。一体、村の風で非常に信心深い村もあるが此村はさほどでもなく、他人の家へ来て仏様の話をするのは此の婆

ひと

さん位なものである。後生願いの故せいが行儀は良い。働き者でもあるから祖母は好いて居る。婆さんは家へ来ると井戸端ですつかり足を洗い、白髪を梳しつけてから敷居際にぴつたりと座つて、

「ハイ、御隠居様、御寒うござりやす。御邪魔様でござりやす。」

歩いて居ると体はまつ直すぐになつて居るが、座るとお腹なかを引つこめて妙に膝が長い形恰になつて仕舞う。

婆さんはこの前の日まで中学の教師の家へ手伝に行つて居たとか云つて、

「めんごい赤坊さまでござりますぞい。眼が大きゆうて、色が抜けるほど白くてない。」

先生様、そつくりでいなさりやす。奥様も順でいなさりやすから昨夜よんべお暇よんべいたいで來やしたのえ、父とうさま様も母かかさま様も、眼の中さあ入れたいほど様子で居なさる。赤坊のうちややは乞食の子さえめんげえもんだつちゆが私わたしでも赤坊ややの時があつたと思やあ不思議な氣になりやすない御隠居様。

他愛もない声を出して笑う。

「そうそう、私がお暇いただく三日ほど前にお国の母かかさま様が、東京かかさまさあ嫁かたづいて居なさ

る上の娘さんげから送つてよこしたちゅうて紫蘇を細く切つて干た様なのをよこしな  
すつたんですがない、瓶の蓋が必してあきませんでない又、東京さ、たよりして、どう  
して使うべえてきてやりなすたのえ。御隠居様あ、御存じなんべえから、分つたらち  
よつくら教えてあげて参じ様と思いましてない。

「蓋に紙が張つてあつたんだろう。

「ありやした、色取つた紙が。

「その紙をあけると、蚤取り粉の曲物まげものの様に穴の明いた蓋になつて居るからそこから  
御飯にかける様になつて居るんだよ。しめりがこない様にそうするんだろう。

「そうでやすか、そんで始めて合点が行つた。田舎者はこれですかんない。

一寸背をぢぢめる様にして愛素笑いの様な事をする。祖母は婆さんに与うと思つてカス  
テラを丁寧に切つて居る。何にも慰みのない祖母は東京から送つてよこすお菓子を来る者  
毎に少しづつ分けてやつて珍らしい御菓子だと云つて喜ぶのを見るのを楽しみにして居る。  
田舎は時間と云う考が少ないのでいつと云う限りなしに来ても来ないでも同じ様な者が沢  
山來るのでその度毎に出すとかなり沢山あつたものでもじきになくなつて仕舞う。カステ  
ラがあと一切分ほか残りがなくなつたりすると急に減り目を目立つて心に感じて、

「もうこれっぽっちになつたのかねえ。

なんかと云う。

祖母の口へ入るより来る者の喰べる方がどれだけ多いか分らない。

東京の習慣だと客に行つて出された菓子をあるだけ喰べる事はしないので、始めのうち炉端へ座り込んで自分で茶をつぎ、よつぽど沢山ででもなければ残さず出したものを喰べる無邪気っぽいお客様を見ると変な氣持がした。

お繁婆さんは木皿へ盛つて出されたカステラをしげしげと見ていろいろの讃辞を呈してから大切そうに端から崩して行く。はじ実際この村や町では藤村のカステラの様な味のものはさかさに立つても喰べられないものである。

お繁婆さんが永い事かかつてカステラを喰べ幾重にも礼をのべて帰つた後から、元、小学校の教師か何かして居た人の後家が前掛をかけて前の方に半身を折りかぶせた様にして來た。何でもない、只町に新らしい芝居のかかつた事とこの暮に除隊になる、自分の家の前の息子の噂をしに來たのである。

祖母はこの婆さんを好いては居ない。げびた話ばかりして何かもらうか食べるかしなければ歸る事のない人だからである。

貧しいと云つても比較的東京の貧乏人よりは何かが大まかで、来た者に何かは身になるもの、例たとえば薯の煮たの、豆のゆでたの、餅等と云うものを茶菓子に出すので、家から家へと泳いで廻つて居るこの人等は三度に二度は他人の家で足して居られるので、孤独の貧しい頼りない生計も持つて居る事が出来るのである。田舎の純百姓で針の運べる女は上等で大方は少しまとまつたものは縫えず、手は持つて居ても畠に出て時がないので、そこに氣の附いた町の呉服屋では襦袢から帯から胴着まで仕立てあげたのを吊して売つて居る。この婆さんは呉服屋の仕立物をうけおい、その呉服屋が此村に持つて居る貸家に、長い事、不精に貧しく暮して居るのである。

不幸な人と云わるべき老婆である。全くの孤独である。子も 同胞きょうだい も身寄みよりもないので家も近し、似よつた年頃だと云うのでよく祖母の家へ話しに来るのである。

年を取つた象と同じ様に体中に茶色の厚いたるんだ皮がはびこつて居て、眼も亦それの様に細く気がよさそうにだれて居るのである。大抵は白い様な髪を切りさげて体からいつも酸すっぱい様な臭いを出して居るが、それは必して胸を悪くさせるものではなく、その老婆さん特有の臭いとして小さい子供達や、飼いものがなつかしがるものである。笑う時はいつもいつも頭を左の肩の上にのせて、手の甲で口を押える様にして、ハツハツハツと

絶れぎれに息を引き込む様に笑つた。その様子が体につり合わないので、笑う様子を見て居る者がつい笑わされるのである。

「まあ、貴方、郡山こおりやま（町の名）さ芝居が掛りましたぞえ、東京の名優、尾上菊五郎ちゅうふれ込みでない。外題は、塩原多助、尾上岩藤に、小栗判官、照手の姫、どんなによかろう。見たいない。

祖母の顔を見るやいなや、婆さんは、飛び立つた様にその小さい眼をかがやかしながら云う。

「行つてお見ねえか？

「私は、あすここまで歩くのが事でなし、郵便局のお政さんとでも行けばいいに。

「お政さんとかい？」

「ほんとに菊五郎が来るんでしようか。

私が聞く。

「去年も来ましたが、から下手の下手でなし、この間、初日に、お徳さんが行つたちゅが去年のと顔が違う様だつて云つてましたぞえ。

「まあまあ、菊五郎の名だけ来るんですねえ。

婆さんは懸命に去年見た、お染久松の芝居を思い出して話してきかせた。お染の「から」が合わないで地頭が見えて居たとか、メリンスの着物を着ていたとか、脚絆をはかないで見つともなかつたとか云つて居る。祖母も私も笑つてきいて居る。こんな時には大抵祖母の歌舞伎座だの、帝劇だのの話が出る。

「小屋だけ見ても結構なもので。

と天井に絵の張つてある事、電気がまぼしくついて居る事、ほんとうに、縮緬や緞子の衣裳をつけて居る事などを、単純な言葉で話すのだけれ共、しまいには行かれも仕ないのに、只行きたがらせばかりするのはつみだと思っていい加減にお茶をにごして仕舞う。町へ芝居を見に行く前に、村の者はこの婆さんのところへ行つて概説だけをきいて来るのであるけれど、時には伽羅千代萩と尾上岩藤がいつしょになり、お岩様とお柳とが混線したりする。けれどこの村でのまあ芝居通である。

婆さんはいろいろ祖母と話をした末どうどう行くときめたらしく五十銭氣張きぱるのだと云つて居た。

「そいから御隠居さん、私の家の前の高橋の息子を知つて居なするべ。あれが暮に除隊になつて来るつてなし、かかあ母かかあどんは今から騒ぎ廻つて居るのえ。花嫁様、さがすべえし、

もうけ口さがすべえしない。百姓には、したくないちゅうてなし。中学出したからですべ。

婆さんは思い出し笑いをして肩をすぼめる。其の息子がまだ中学に居た頃、この婆さんの家に居て通つて居たが、お針に来る娘が夢中になつて可笑しいほどだつたが、いつの間にか噂が立つて娘はお針に来なくなつた事を「さもさも若い者が」と云つた口調で変に笑いながら話す。

村の子がその息子に娘からの手紙を持つて來たが留守だつたので、婆さんが受け取つて帰つて來た時渡したら、火の出る様な顔をしてすぐ外に出て行つたなどとも云つた。

「十七か八で色は白し、眼は大きし、ほんに小栗判官の様でなし。あの娘も、こちらの娘にしては、小綺麗な娘でしたぞえ、私の家へ来ん様になつてから判官様は夜おそくまで帰らん事がよくありましたつけし。逢うて來るのだつべ。まだ嫁むすめかさらんちゅうことだてば、判官様に、嫁様が來ただら、化けて來べえて、ハツハツハツ。

お婆さんは、いつもの通り顔をまげて笑う。

「三年、日に照らされづめで來たのだでは、あの白いのも狐色位になつたろう。

村の聞新しい事柄がいつもこの婆さんの耳へどうしたものか先ず第一に入るものと見え

る。

身寄りない割りに我儘で、すき勝手に彼の人はきらいだとか、彼の女は、変だと云う。そうしてそう云う人の噂はきっと悪くつたわるのである。

その噂の元はと云えば、誰も知る者はなく、婆さんの耳元だけ、聞えたと感じた事もなかなか少ないのである。中傷するほどの腕はないけれど、自分の交際ばかりを次第次第にせばめて居るのである。

「先生とこの奥様もこの上なしのぐうたらですべ。朝から晩まで流しの上には、よこれものがたまつて新らしい茶碗の縁が三日と無疵むきずで居たためしがないとなあ、三十九にもなつて何てこつたし、あまり昼、夫婦づれで、仮うたたね寝ばかりしているからだなつし、貴方。

それが、裏庭にある小学校長の家で妻君が庭を掃いて居る時にきこえてからと云うもの、もらひものが腐りそうになつても、食べきれないほど野菜があつてもやる事はびつたりやめ用事があつてもこの婆さんの居る時は必して声さえかけないほどになつた。

実際この細君は、田舎の小学の先生の細君の一番好い典型である。その、のろい事、わかりの悪い事、眠りたがる事は私でも始めて位である。台所でごどごとしてでも居なけれ

ば午後からほんとうに夫婦づれで明けっぱなした座敷の中央にころがつて居る。絶えず、人の好い微笑を口にうかべて、何と云つても必ず、

「そうだけんども。

とつける人である。瀬戸物かきの名人だと云う評判もある。それは事実らしい。日に一度、焼物と焼物のぶつかり合う、あの特別な響のきこえない時はない。

「氣をつけろつちや。

校長さんは怒鳴るのである。

毎週土曜に町まで通つて、活花を習つて居るのが流石はどうなずかせる。そんな時、主人は学校からかえつて来て、南金錠を自分であけて雨戸を引きあけ細君の置いて行つた膳に向つて長い事かかつて昼飯をするのである。

毛むくじやつて云つても、ああも毛むくじやらなものかしらんと思うほどの毛むくじやらで、鬚は八の字に非常な勢ではね上り、その他の顔中、こまかい和毛の黒いのが一杯に掩うて太陽に面して立つた時は、嘘でも御まけでもなく、顔から<sup>かげろう</sup>陽炎が、ゆらめきのぼつて居る様に見える。

人は好い、その細君を大切にするだけ人が好いのである。私に少しまとまつた話をする

のは此人だけれ共、幾年か昔の記憶のままの頭は折々、妙な事を云わせる。人によつて言葉を選まないから、或る人は威厳のある先生様だと思い、或るものは、分らない事を云う御仁だと思う。

先生の生活はまことに平穏無事である。そして幸福である。一番大きな息子は、京都で医者になつてもう細君もある。けれ共、なぐさみに小さい男の児を育てたいと云つて居るのである。

斯うして心配なく、こんな空気の好い処に住んで居て、早死にをしたのを聞いたら私はきつとそれを間違いだらうと云うだらう。

秋の末頃までこの村の人達は生きて居るけれ共、一雪下りるともう死人の村と同様で、人々は皆家へ閉じこもり、「わら靴」を編んだり「負いかご」を作つたり草履を作つたり、女は出来るものは縫物だのはたを織つたりする。折々田や畑に見える人影は、たまあに自分の持地を見まわる人の影で、往還でさわいで居るものは犬と子供と鶏だけと云うほどになる。

猫などは十一月に入ると大方は家に引込みがちである。この先生は十二月の末頃までは、雨が降つて、吹雪がしても通わなければならぬ。

先生にとつて最も苦痛な冬は草の色にも木の梢にもこの頃は明かに迫つて來た。厚い外套と深靴、衿巻、耳掩を、細君が縁側にならべばなしで家を人つ子一人居ずにして、いやと云うほど怒られて居たのもついこないだの事である。

### (五)

私が斯うやつて、貧しい平凡な村に来て、一冬越すなどとは、今斯うなつて見る時までは、思いさえもして居ない事だつた。東京に居て、越す冬は、今此処で会う晚秋位ほか、寒さも、淋しさも、感じはしない。いくら寒いと云つても道をあるけば家屋は立ちならんで、往来もはげしいし、家の中の燈だの、火だのが外まで明らかに美くしい輝を見せて居る。

冬の淋しさ、それは斯んな北の人の乏しい山ばかりの貧しい村などに於て、ことに深く深く感じる事である。恐ろしいばかりの淋しさを持つて冬は日々に迫つて来るのである。収穫がすんだ頃になつて氣まぐれな私は此処へ來た。わざわざ寒さの中へ飛び込んだ様なものだ。来年の冬は、私は又東京の家で、ふくれた様に火にあつたまつて暮す事だろう。

寒ければ逃げて行く家を私は持つて居る。逃げ様にも逃げられぬ、この村人の哀れさを思う。霜はもう十月の末頃から見える。けれ共流石に日のある中は裕で素足で居られる。もう十一月十二月となるとすっかり冬景色になる。こないだうちから山の頂には雪が見えて居る。四方を山にとりかこまれ、中央に低くある村には、急に冬が来て、去る時はと云えば、いつまでもいつまでも去りかねた様な様子をして居るのがならわしである。

四辺の木立はすっかり枯れてしまつた。三番池の周囲の草原の草は皆、かれはてて、茶色になり、朝々の霜で土がうき、ポコポコになつて、見通せる限り皆、なだらかなでこぼこになつて居る。桑は皆葉をはらい落して、灰色のやせた細い枝をニヨキニヨキと、あじきない空のどんよりした中に浮かせて、その細いに似合わない、大きな節や「こぶ」が、いかにも氣味の悪い形になつて居て、見様では、よく西洋のお伽話の插絵の木のお化けそつくりに見え、風が北からザーッと一吹き吹くと、木のお化けは、幾百も幾千も大きな群になつて、骨だらけの手をのばして私につかみかかろうとする様だ。川の水も減つて、赤っぽい粘土のごみだらけのきたない処が見え出し、こちこちになつてひびが入つて居る。小魚の姿などはどうにから見えないのである。

町につづいて居る小高くなつて居る往還は、霜が降つても土は柔くなろうとはしづ、只

かしかしにかたまつて、荷馬はよく蹄を破るし、人は下駄を早くいためる。電信柱は、ブーン、ブーンと、はげしうなりを立て始めた。

何と云う寒い淋しい事だろう。灰色の空は、はてしもなく重くおいかぶさつて、晴れ渡る時は極く少ないうちに夜になつて仕舞う。人の声も犬の声もしない。狐の提灯が田の中を通りと云うのも此頃である。雪でも降れば、雪見舞の人々が通りも仕様けれど、雪降り前の、何となくじめじめした、雨勝ちの今頃は皆が皆こもつて居るので、人通りと云うものはまるでないのである。

町からの魚屋も大方は来ない。辛い鮭と干物とが有る時は良い方である。私共は毎日野菜で暮して居る。牛乳の有るのを幸、それで煮たりして少しは味の変つたものもたべて居るもの、魚のなまか、牛の焼いたのがたまらなく欲しい事がある。そう云う時に折よく東京から送つて呉れる、魚の味噌づけ、「ひとしお」の嬉しさは一月に一度か二度ほか魚のたべられない処へ行つたものでなければ分らない事であろう。外へ出てする事はなし、農民は、冬が一年中の食時である。正月にならないでも餅をつく。東京の様に四角い薄平うすべつたいものにするのではなく、臼から出したまんま蒸すのでまとまりのつかないデロツとした形恰になつて居る。それを手で千切ちぎつて、餡の中や汁の中へ入れる。あまりは鍋など

の中へ千切つて入れて置くのである。見た所は、出来上りでも東京のよりは倍も倍も不味<sup>まず</sup>まづしい形をして居るけれ共味は却つて良い位である。

こうして餅をつき一日がわりに家々をたべて歩いてなど居るのである。こんなに寒くて居ながら食物は非常に粗末で餅等は上等の食料である。この村で一番食物に困るのは云わざと知れた冬である。私は、寒さよりも、食物よりも、その淋しさに堪えられない程である。このまんまズーツと地の中に沈んで行つて仕舞いそうな気持のする地面の様子や枯坊主になつてヒーヒー云つて居る木々の様子は、こんな処になれない私をよほどつよく刺激する。私は毎日こもつて火のそばをはなれず着ぶくれて身動きもならない様にして居るのである。

この寒さの最中、満期になつて帰つて來た高橋の家の息子は帰るとすぐ家へ來た。面長の、眼の大きい、すんなりした顔立の男だけれ共、少し氣の遠い処が有りそうな口元をして居る。色なんかちつとも白い事はない。額の生際の方が少し顔の下の方よりは白っぽい。まだいかにも兵隊帰りの様子をして居て歩くのでも、口の利きかたでも「…………終り」と云いたげな風である。

「そうであります。

と云うのがいやに耳ざわりに聞えた。辛かつた事、面白かつた事を細々かぞえたてて話したのが祖母には耳珍らしくてよかつたらしい。

冬の最中に、銃の手入をするのが一番つらかつたと云つた、赤切れから血あかぎがながれて一生懸命に掃除をする銃身を片はじから汚して行く時の哀なさなさけと云うものはない。銃を持つて居る手がしごれ、靴の中の足がこごえて、地面のでこぼこにぶつかつてころんだり銃を落したりする。

祖母は涙ぐんできいて居た。来る人も少ないので祖母は長い事引きとめ、いろいろ食べさせたり、飲ませたりして、反物をお祝だと云つてやつた。涙を襦袢の袖で拭きながら、「お前もまあこれで一人前の男になつたと云うものだ。これからは嫁さんさがしにせわしい事だねえ。

と云うと男は、

「何そんな………：

と云つて座りなおした。祖母は自分の身内のものたのもの様な、頼しい様な気がして居るのだろうなどと思つて私は見て居る。学校仲間、在郷軍人、親類などから祝によばれたり呼んだりするので母親はせわしがつてゐるとうれしそうに云つて行つた。

高橋の息子が帰つた頃から又寒さがました様で、段々空氣は荒く、風の吹き様もなみではなくなつて來た。祖母は、吹雪の時の用心に屋根瓦を見させたり、そこのいらの納屋の壁や、野菜を入れて置く穴倉に手を入れさせた。毎朝来るトタン屋は、風呂場の樋だの屋根だの手入をして居る。いかにも手が鈍い。東京の職人も煙草を吸う時間の永いには驚く様だけれ共、まして此処いらのはひどい。弁当は持つて来ない。縁側に腰をかけて出して呉れる膳に向つて暖つたかい飯を食べる。何故職人に平常の時膳を出してやるのだと聞くと此処らでは少しゆとりのある家では、皆昼を出すのだと云う事だ。あんまり職人につくして居る様な気がする。

トタン屋も来ない様になり、家中は一層ひつそり閑かんとして、私が大股に縁側を歩く音が、気の引ける様に、お寺の様に高い天井に響く。持つて來た本もよみつくした私は、一日の中、半分私が顔を知らないうちに没した先代が、細筆でこまごまと書き写した、戦記、旅行記、物語りの本に読みふけつて居る。若しそうでない時は、炬燵で祖母ととりとめもない世間話しや、祖母の若い時分の話をきくのである。風は日一日とすさんで雪の降りつもつた山からは、その白さが下へ下へと流れ来る。

始めての雪の降つた前の晩の寒かつた事と云つたら、私でさえ、床の中でガタガタする

ほどだつた。

「寒くはないか。

ときく祖母の声さえ震えて居たので私は女中に湯タンポを入れさせた。

「お前が居なければ、私が云うまで氣をつけて呉れるものはない。

祖母が涙声で云つた時、私は、急に母の居る処へ飛んで帰りたいほどの、どうしていいか分らない、悲しい様な淋しい様な氣持になつた。私は「何故こんな処へ来たのか」と悔む様な氣持になりながら涙をこぼして眼つてしまつた。目を覚した時は二時頃だつたろう。

あんまり風がはげしい。雨や風のひどい時は、恐ろしい様な氣持がして眠られない私はきつと、この風の音に眼をさまされたのだろう。障子のガラスについた小障子をあけて戸のガラスをすかして見ると、灰を吹きつける様に白い粉が吹きつけると一緒に、ガタンガタンと戸がゆされる。こんなにもひどい吹雪を見た事はなかつた。始めの間は珍らしい気がして見て居たけれど、段々時が立つにしたがつて私は恐ろしくなつて來た。私は此上なくいやなのだけれど、祖母がきかないでの、部屋の中は真暗である。二つの床をぴつたりとよせて枕屏風が暗い中でも何か違つた暗さに私達を取りかこんで居る。

一尺一寸位の四角な面に絶えず白い粉が乱れかかつて、戸は今にもたおれそうにガタガ

夕きしんで、はめ込んだガラスの一種異つたビリビリ云う音が寝しづまつた家中に響きわたる。下らないものでも見つめて居ると恐ろしくなるか又は嬉しくなるものだと私はいつでも感じて居る。明るい中でみつめるものの総ては土でも木でも色々な日用品でも皆、自(ひとり)然に微笑が湧きのぼる様な柔い気持になる。けれ共夜の暗い中で物を見つめて居る時の恐ろしい事と云つたら、もう躰がすくんでしまう様な、顔を掩わずには居られない様になる。私はじいつと眼を据えて白い粉雪の飛びかかる四角い処を見て居るうちに段々その四角がひろがつて行き、飛び散る白いものも多くなり、それにつれて戸の鳴(な)る音さえ、ガンガーン、ガンガーンと次第に調子をたかめて行つて、はてしもなく高く騒々しくなつて行く音は、家中のありとあらゆる戸——袋戸棚の戸でも、戸棚でも、ましては枕元の屏風からさえ響いて来る様に想えた。

祖母の寝息さえ私の耳には届かない様になつた。こんな事は勿論、私の妄想にすぎないと知りつつも、此上ない恐れに心を奪われて、いきなり枕へ頭を下すやいなや、夜着を深くかぶつて、世界中たつた一人の身になりでもした様な、たよりない気持になつて、静かな眠りに入ろうとした。東京に居たら、こんな時、私は母の床の中へかくまつてもらう。どんなに恐ろしくても、安心な気持になつて母の手だの袂だのを握つて氣のしずまるまで

置かしてもらう。私は火を吹く時の様に、頬をかすかに、ふくらませたり、すぼませたりして寝入つて居る祖母を起す氣にもならなかつた。

安眠が出来ないまんま朝早く起きると変な工合に雪が積つて居るのを見つけた。北からのひどい吹雪だつたのですべて北に面した方ばかりに吹きよせられた雪が積つて居る。前の庭の彼方むこうを区切つて居る低い堤には外側の方がひどく白くなり立木の皆がそうである。雨戸はことにそれがはげしく北の雨戸は随分あつくなつて、戸袋に入れるのに女中は雪を簾ではらい落したほどだけれ共、南側のはほんの少しほかついて居ない。

長く此処に居る祖母は、「こんな事に驚いて居るなら三尺も雪が積る時はどうする」と笑つた。実際私はまだ七寸より厚く積つた雪を見た事はない。

小学校の先生は、自分の家の縁側に出て、

「ひどく吹きやしたなあどうも昨晚は妙に凍ゆうべしみると思いやしたよ。

とこつちの縁側へ朝のあいさつをした。女中は手がかじかんで、湯のみ茶碗を破つて仕舞うほどだつた。朝になつてもまだ、少し許り吹雪めいたものがして居るので女中等は少し遠くにはなれてある納屋へ薪を取りに行くのさえ出来るだけのばして居た。

台所の炉には枯木をうずたかくつんでボンボンもやして居る。もう少しして来て呉れる

雪見舞の百姓共をすぐ暖めてやれる仕度である。あはれて氣むらな、降り様をした雪なので四辺の様子に、美くしさなどと云うものは少しもない。或る処は、まつ白い海の様に見えるかと思えばそのわきには茶色の草や木や煙がむき出しになつて悪く云えば「なまず」だらけの老婆の顔の様にみつともない。祖母と女中は物ずきだと云つて随分止めたけれど、私は、傘をさして足駄を履き、ブルブルしながら庭の一一番深く積つて居そうな処々を選んで歩き廻つた。皮膚に粟が出来て、唇が紫になり、いつも私がいやがつて居る通りに鼻が赤くなるのが自分にも感じられた。庭の堤どての上に並んで居る小松に積つた雪は何と云つても美くしい。裏の竹藪で雪を落してはね返る若い竹のザザザツと云う音が快く聞えて来る。車井戸をすつかり雪で包んでお菓子の様に甘そうに、あそこから水が出ようなどとは思われない形になつて居る。

一廻りして帰りかけた時、コールテンの足袋を履いて居る足の指の先が痛くなつて來た。どうかするとつまずきそうになる。片手には大きな番傘を持ち、左の手は袖の口に入れて、袖口の処を一寸指先だけで内側にまげ肱を張つて調子を取り、一足歩いては雪を下駄の歯から落し、又一足行つては置土産をし、来たあとを振りかえるとズーッと向うの曲り角から今自分の立つて居る処まで、歯の幅に下の方に泥どろが黒くついて居る雪のかたまりが

二つずつ、木の根と云う根の処に必ず思い思ひの方を向いてころがつて居る。

手や足がひどくつめたくなつたので、私は家へ上ろうと思つて堤にそうて入口の方へ行こうとした二三間の木も杭もない中央の処で歯の高さから二三寸も高くはさまつた雪の始末に、あぐねて仕舞つた。足を宙に振つて見ても、只、下駄が飛んで行きそうになるだけで雪は一向に落ちない。雪を落す事は断念してその至極歩きにくいコロコロする下駄で、そのまま歩く事を工夫した。つまさきをすっかり雪の中へ落して、爪皮一枚を透して雪の骨にしみる様な冷たさを感じながら荷やつかいな下駄を引きずつて歩き出した。

ころぶまいとする努力のために私は一心に地上を見て体中の神経を足の先に集めて居るとフイに耳元で、

「やや子（赤坊）の様な事してなさるて事よ。

と云う声に驚いて見ると、甚五郎爺が大きな雪かきを肩にかついで、長靴を履いた上にわらぐつを履いて「もんぺ」をだぶだぶにつけて立つて居る。見ると、家の持地の入口の道から門まで一直線の路をつけて、踏み先へ先へと、雪かきを押して来たものと見え、今自分が立つて居る処までほか地面は現われて居ない。父がまだ若い時から居た爺なので、私の事をまるで、孫でも見る様な氣で居る。顔中、「たて」の大波をよせて歯ぐきを出して、

私の様子を見て居る。

「東京さ、告げであげますだ。さ、来なされ、そらころぶころぶ。

爺は、その大きな、私の頭なんかは一つかみらしい変に太くて曲つた指のある手で私の手をひっぱり、三つ子を歩かせる様に私を家へつれ込んだ。

この様子を見ると先ず笑つたのは女中で、怒りもならない顔をして祖母は、

「まあ何て事だえ、甚五郎が来なかつたらどうする。

と云いながら、私に奇麗な足袋を出して呉れた。祖母は、

「鎌足らず公だから、三河屋の呉れた餅を三ヶ一ほどお汁つけの中へ入れておやり」と云う。

甚五郎は炉で煙草を吸つて居る。

鯛の眼の通りな水色の眼玉は、たるんだ瞼をながれ出しそうになつて居て、「たて」や「横」の「しわ」が深い谷間を作つて走つて居る。大抵は頬ほほげた頭の方に、黄茶色の細い毛が少しばかり並んで居る。

歯のない口をしつかり結んで「へ」の字形にして居るので何だかべそを搔かいてる様に見える。耳のわれそうな声で話すが、自分は非常に耳が遠い。十近く年上の祖母から「耳が遠いよ」と云われるほどである。随分長い間、今小学校の校長の居る処に住んで居て、畑や

米の世話をしても居たが、氣の勝つた年寄の召使と主人とは、しばしば衝突が起つて、しばらく東京の方へ来て居た事もあつたけれど、今は、隣村とこの村の境のどつちともつかない様な處へ息子からの「あてがいぶち」で暮して居る。少なからず抜けては居るが、この爺をこの上なく大切がつて居る女房は、百姓共の小供の着物等を縫つてやつて僅かの口銭を取つて居る。

長い事、煙草をふかして居た甚五郎は「やつこらさ」と立ちあがつて、祖母の居る茶の間の入口に小山の様に大きく膝をついて拳固<sup>げんご</sup>にした両手の間に頽げて寒そうな頭を落す。

「どうどう降りやしない。寒い事寒い事。

と目を細くする。そして私の方を見て、笑いながら、さつきの私の様子を細々<sup>こまいま</sup>と祖母に説明してきかせるのである。お汁<sup>つけ</sup>の中の餅をありつたけ食べつくしてから甚五郎は水口から井戸までの細道をつけ一通りぐるりを見廻つてから、手拭をもらつて帰つた。

それから後、引きつづき引きつづき有象無象が「悪いお天氣でやんすない、お見舞に上りやしだだ。

と云つて来た。その中の或る者は、水を四肩（二つの手桶を天秤棒にかけたのを一肩と云う）も汲んで行つたり、これから四五日の薪をすつかりこしらえて行つたのもあつた。け

れ共中には、

「悪いものが降りやしただない。

と炉端に上つて下らない事をしやべつて餅だけはあまる程食べて何もしずにそのまんまと  
タヌタ帰つて仕舞うものがあつた。

「あの男とつさま様あ、餅ばかり振舞われに来たのだし、塵っぽ一本、拾うでなしに帰りやし  
たぞえ。

そんな餅食に来た男があると女中は云つて居た。斯うして暫のうちに餅は二つ三つほか  
千切つたのが残らなくなり、やる物を入れた箱の中から三四本の手拭が出て行つたのであ  
る。

夕方近くまで吹雪が晴れ渡らなかつたので、その日は一日、日の目を見ない、じめじめ  
したわびしい日を送つて仕舞つた。祖母は夜までも、炬燵の中で「はぎ物」をして居る。

私は東京へ、今年の初雪を知らせてやる。手紙の中へ、

「私は今何故、こんな時に、こんな処へ来たかと、自分の物ずきな心がうらめしい。寒  
には堪えられても、口に云えないこの淋しさには、到底打ち勝てそうにもない気がしま  
す。

まあ考へても御覧なさいよ。今頃から雪は降つて小一日吹雪は止まない。その中で私は東京に居る時の様に更けるまで息をはずませて話合う様な人はたつた一人もない山中に、いつもいつも待遠がつて居る夜が来るやいなや、寝床へもぐり込む。寒いのでそちらの様に長起きが出来ないんです。つくづく東京が恋しい。平常私は『自分は、手足は山の中に暮しても頭だけ——私の仕事なり考えなりは大都会の中央で活動して居なければ満足出来ないだろう』と云つてましたが、尚更、私は、そう云う人間である事が明かになつて来ました。帰りたい、ほんとうに帰りたい。けれ共、東京で桜が末になるまで、冬の寒さにつかまえられて、雪の積つた中に祖母を見す見す残して行く事を考えれば、そもそも出来ない。皆気が利かないから私でも居なければ、暖まらない時に湯タンポを入れたり、夜着の肩を打たたいてあげるのは一人も居ないんですものねえ。

と書いて友達に、家へは、キニイネの丸薬とその処方を送つて呉れる様に云つてやる。私はすっかり冬籠りの仕度をするためにその他、毛足袋だの何だのも云つてやつた。女中は炬燵の中で、松の枝に下つた「つらら」に砂糖をつけてカリリ、カリリとたべて居た。

雪解ゆきげで一しお寒さがはげしい。

キラキラしい太陽が面かおを出したので雪からは少しづつ水蒸氣が立つて行くのが見える。あたりが何となし、うるおつて、ハアツと息を遠くから吹きかけた鏡の面の様な空合になつて居る。太陽は美くしい色に輝いて居るけれ共、寒さはひどいので、小川の面から息が立つて居る。土地は汚なくなつて行くばかりである。昨日、一日休んだ馬が、パカツ、パカツと勢よく、町へと里道を小さい穴だらけにし、草鞋の両方へ、泥をとました足跡で、道はゴタゴタになつて仕舞い、鶏が、馬の蹄の跡の穴の泥水みたいな中へ足を踏み込んで、腹まで羽根をどろでかたまらせて居る。

小川の水かさが少しました。三番池には、非常に沢山の水鳥が群れて居る。五、六羽白い色のも見える。何だか分らない。大抵は鴨位の者であろうが、白いのだけは流石にもつと好いものらしく見える。

昼近くなつてから甚五郎爺が一羽まだバタバタして居る鴨をさげて來た。田の中に昨夜から「繩落し」を掛けてとつたのだと云つた。大方彼の群の一羽で有つただろうと想つて見る。非常に羽色が美くしい。頸の、群青色等は又とないほど輝いて、そのまんま私の頸

に巻きつけたいほどだ。足なんかもさえた卵色をして居る。

食べるのは惜しいからこのまんま飼おうと云つたが聞き入れられなかつた。甚五郎爺も、あまり食物がないからとつてきたのにたべないなら又放して仕舞うとさつさと足を握つて裏へつれて行つて仕舞つた。

鴨の肉は好いて居ない。何だか鴨くさい臭がする様だ。鴨雑煮をすると云つて居る。私は裏へ行かない。こしらえるのを見ては一切だつて喉を通るものではない。甚五郎爺は薬だと云つて鳥の「きも」を出すとすぐ生のまんまのむと聞いて、私は喉へ丸なまたまが上つて来るようだつた。鳥にも「きも」なんてあるものかしらん、私は獸ほかない様な気がして居た。昨日の雪見舞の者達に皆食べられて餅がないので女中は源平団子にもちごめと引きかえに餅をとりに行つた。東京の鴨の様に臭がない。

お八つ頃、例の芝居すきの御婆さんを呼んでやる。結構だ結構だと云いながら、年に合わしては随分沢山たべて、こないだ見て来た多助の芝居の話をした。多助が「青」と別れる処をどれほど感動したものか、泣きながら、

「貴方——芝居は青の別れに限りやすい、別れたくないって、多助の頬に、自分の頬をすりつけてない。

と云つた。十二時頃、小一里も歩いたので風邪を引いたと云つて、赤坊の様にケン、ケンと云う「セキ」をして居た。鴨の肉のただ煮たのを小さな皿に持つて行つた。

「粥でも作るつもりだかし」と祖母は笑つて居た。

湯のたて廻しと云う事が行われて居る。今日は誰の家で湯をたてると、あすは、誰の家でたてると順をきめて、湯をたてる番の人の家へもらいに行くのである。家で湯をたてると彼の小学校長の家族を始め、あすこの婆さん、此処の女房と、湯をもらいに来る。自分の番になるのを待つて居るものや、もう上つたものは炉の廻りに集つて、茶をのみのみ世間話をして居る。血統も分らない——又どんな病氣を持つてこうして居るかもしけない人達を、自家の湯へ入れると云う事は随分と危険な事だ。外でぎょううずい行水をつかえなくなつてからだけでもたててる。小銭湯の様な特別の湯槽をだれかの家へあずけて、湯のないものは、その家の家族のとは違つた湯槽に入る様にしたらしいだろうのにと祖母にも云つたけれ共、湯のたて廻しなどが平常気の置けない交際機関になつて居るので、今急にそれをやめれば皆が不自由するし、又、悪く思われるからと云つて居た。祖母と私は一番先へ入る事にきめて居るのである。

そんな事をしない東京から来て見ると何だか不安心だ。銭湯を知らない私は、温泉でさ

え気味が悪い様でいやがつて居るのだもの、新らしくなりもしず、汚れた水を吸い込む木の槽の肌にはどんな汚れが誰から出て入つて居るだろうと思うといくら新らしい湯に最初入つてもいやである。とうとう私の居る間は立て廻しから抜けでもう事にしたけれど、小学校の先生の家の人は、あの「おともさん」は立つ毎に来て入つて行つた。これ共はこばむ事の出来にくい人達だつた。その晩は校長が手拭をドテラの上から帶の様にして湯に入りに來た。

十五分もかからないで上ると私共の炬燵に入つて、会津の方の女の話をした。非常な働き者で、東京の娘達の様に箸より重いものは持てない様には必してして居ないと殊更、私にあてつけでもする様な口調で云つた。先生と云う臭味がこんな時ブーンとする。私はだまつてきいて居る。祖母はおつとめにじいつとしてきいて居るらしく時々妙な質問を出して先生をどぎまきさせて居た。私がだまつて居るので、いろいろの事に話が渡つて、しまいには、女に女学校以上の学問を養わせる事や、専門的な智能を養わせる必要はない。学問などをするから男を馬鹿にしてかかるなどと云つて居た。時々、私をかあつとさせる様な事を云う。まるで私とすつかり違う頭の人に自分の考えを発表した処で無意味だし、又それほど抜けても居なかつたから、時々いやあな顔をしながらも一言も返さずにだまつて

只きいて居た。一段話すと、祖母は梅の汁<sup>つゆ</sup>が自然に発酵した酒を進めた。私も一口なめて見たけれど、舌の先がやけそうにヒリツとした。随分つよいらしかった。

校長は小さい猪口に三四杯飲んですっかり機嫌になり、自分等が若かつた時、寄宿舎で夜中に食物をとりに行つて小使だと思つて舍監にソーット醤油を呉れと云つて、それなり懷に一杯薯を抱いてつかまつた事を、顔中の和毛をそよがせながら話した。そして炬燼布団に、鬚もじやの顔を押しつけて居眠りを始めた。祖母は笑いながらゆり起した時、見事な鬚に白く「よだれ」のしづくがたつた一つつましげに輝いて居た。その「よだれ」のしづくはすっかり私の気持をやわらげて仕舞つた。

翌日とその翌日とかかるつてすっかり雪解はすんで仕舞つた。正月も迫つて來た。けれど、新、旧と二つの暦をつかつて居る此村では新と旧と二度正月があるので、両方ともが割合にざつとすまさられるのである。別にこれぞと云うほどの事も、この村ではして居ないとは云うものの、荷馬の背に新らしい下駄や一寸した家具がつんであるのも、やつぱり、あらそわれない暮らしい氣持がただよつて居る。ほんとうに、暮の氣持がただよつて居ると云う位のもので、あの一番せわしない、掛取りや、来年の準備に必要なものを景氣をつけて売つて居る商人やの姿が見えないから、いかにもしづかに自然に年の暮が立つて行く。十

二月の末、それはこの上なく日の短かい寒い時分なので、正月の買物に町へ出掛けるものさえ少ないのである。

東京の友達からはクリスマスの事等を云つてよこした。ほんとにもうクリスマスも「あさつて」になつた事だと思うと、今更、正月が近い内になつたのに驚く。東京に居ればこそ、小さい兄弟に、贈物をしたり、外からもらつたりしてクリスマスを忘れる事はないけれど共、此んな処に来て居るとクリスマスの「ク」の字さえ口に出ないので、私も忘れ気味になつて居た。暮を知らない様に静かな此村で、年越しをするのもおだやかで好いだろう等と思う。

町へ雑誌と、書く紙を買いに行こうと思いながら、寒さにめげて一日一日とのばして居たが、歳暮売出しを町の店々は始め、少しは目先が変つて居るからと云う事で、芝居すきの「御ともさん」とお繁婆と女中とで午前の日が上りきつて、暖い時に出かけた。

頸巻(えりまき)はいくら毛でも鼻の先がひどくつめたい。祖母は、足袋の先に真綿を入れて呉れたので足はいくらか暖かい。一本筋の高い処にある道を、静かながら北の山からすべり落ちて来る風にあらいざらい吹きさられて、足の遅いお伴と一緒に、私はもう一つと早く歩きたいもんだなあと思いながら歩いて行く。道はまだ、こちこちに凍つた様になつて居る

ので下駄が少し強くあたると破れそうな音をたてる。二枚重ねた銘仙の着物の裾がボタボタと重い。頭巾をかぶつて来ればよかつたとも思った。「御ともさん」は東京弁と、此村と山形——米沢の言葉をとりませた言葉でしきりに私に話しかける。芝居は好きか、どの役者が一番好いか、東京では、どんな外題がもてるか。婆さんの話と云えば芝居の事ばかりである。けれど、私の返事は皆婆さんには満足を与えたかった。何故なら、お婆さんのきく様な気持で好い役者、悪い役者に気をつけた事もなし、毎日の事に追われて居て、換り毎に出かけるほどの時を持つて居ないから処々での出しあるのも知らないのが多い。

「東京に居なさるから、毎日毎日芝居見てなさるべえと思つて……。お嬢さんなざあ、御しやらく（御めかし）して毎日毎日遊んで居なされる身分さ。

婆さんは、私の家に、金のなる木があつて、私は不死の生をさずかつて居るとでも思つて居る様な口調で、スラスラと「何のこれしきの事」と云う調子で云う。

「ほんにそうだのし。

浅黄の木綿の大風呂敷を斜に背負つて居るお繁婆さんは、背のものをゆすりあげて合づちを打つ。

この人達は何故、私がそんな立派な御身分に見えるのだろうと思う。あんまり平常、尊

がられもしず、往来を歩いて、私を知つて見るのは一人もなく、自身も亦、知られるべき筈のものでないと思つて居る私が、此処に来て持ちあげられると変な気がする。腹が立つのではないにきまつて居るが、何だかいかにも皮肉な様な、間の悪い様な、くすぐつたい気持がする。けれ共、あんまり自分達の世界と私達の世界を違えて考え、何の苦勞も努力もしずにのらくらと暮して居る様に、馬鹿馬鹿しいほど云いたてると、仕舞いには私は腹をたてて仕舞う。その時も私は歩きながら大つまみに東京の生活振りを話してきかせた。皆は東京と云えば明るい方面ばかり見て居るので容易に私の辛い、みじめな生活の有様を信じない。

長い長い田圃道を通りすぎて町の一番はじにある傘直しの家の前へ来た時には、お互に氣持のわかりにくい私共はもうだまり返つて只セツセと歩いて居た。顔が赤くなつて、赤い顔の中央から白い湯気の様な息が立つて居る。お繁婆さんは、手拭を出して頸の廻りを拭いて居る。郡役所の下へ来た時にはもう、間の抜けた楽隊の音が聞え出し、停車場から荷物を持つて来る配達が私の顔をにらんで通つた。思わず私は顔を一撫として女中と顔を見合せて笑つた。婆さん連は、端折つて居た裾を下した。広い町の両側の店々の飾りを見て歩いた。

よく見世物の小屋に立つて居る様な幟りに「歳暮大売出し」「大々的すて売り」「上等舶来、手袋有」などと書いたのがバタバタ云つて居る。東京で歳暮の町を歩いて一番目につく羽子板等はあんまり飾つてなく、あれば色取つた紙を板にはりつけた二三錢のか、それでなければ八重垣姫や助六等を粗末な布で押し絵にしたものばかりである。罽の方がまだ見事に書いたのがある。まだ小学があると見えてそう子供は居なかつたけれど共、十四、五からの娘達が頸巻をし、手を懷に突込んで、雑貨店だの呉服屋の店先に群らがつて居る。大抵は日本髪にして居る。此処いらの人から見れば、随分はでに見える着物を着て、大股にスマスマ歩く私を、いつまでも見て居るのが気に障つた。化粧品店には、あざやかな掛ける人もないリボンや新ダイヤの入つた大きな櫛や髢たばごめ止が娘達の心を引いて光つて居る。「おともさん」が縫いあげた、帯だの、着物だのの貰銀を主屋の方に行つてもらつて居る呉服屋の店先で、私は祖母の胴着と自分の袖にするメリングスの小布こぎれを見て居た。出すのも出すのも地味なのばかりなので、私は袂を出して見せて、こんな様なのを見せて呉れと云つた。番頭は早口に遠慮なく出させる私を、変な顔をして見た。褪紅色の地に大きな乱菊を出したのと、鶯茶の様な色へ暖い色の細かい模様を入れたのを買うと、あつちの隅でお繁婆さんは、出来上つて居る瓦斯の半天の袖を引つぱつて居たので、せかせまいと女中

の見て居た袴衿を一緒に見る。赤味のかかつたうすい茶色の厚い紬の様な地の袴衿があつたので、その模様を太い綿糸で縫いとつて本の表紙にするつもりで買って仕舞つた。

その店を出た時お繁婆さんの背中の風呂敷は少しふくれて居た。中にはさつきの袴天が入つて居るのだ。「おとも婆さん」も何となしゆとりのある顔をして居る。皆、相當に満足しててんにかなり重いものを持つて家へかえつたのは午後もかなりになつて居た。私と女中は二人とも重いものをさげて居る。村の酒屋からの酔は中が割つてあるので買って来たビール瓶をさげ、砂糖と洗濯シャボンと髪の油と、そんなまとまりのない散り散りになるのを持つて居る女中は、絶えず両方の手で仲の悪い互々を巧くまとめなければならず、反物を二三反と本をかなりと菓子の包をもつて居る私とは、重い思いをしながら二人の婆さんに別れると、家まで笑いつづけて來た。

祖母の顔を見るとすぐ、

「御隠居様、『おともさん』は……

と一層はげしく笑いこけながら、呉服屋からうけ取つた金を小口から買物にはらつたのだけれ共、一度代だいをはらうと、黄色い財布からチャラチャラと一つあまさず出して、すつかり勘定をしてからでなければ仕舞わない。幾度でも幾度でも繰返して、私共をやたらに待

たせたとその錢を勘定する手つきまでして見せた。祖母は、

「あのお婆さんは、今夜きつとその財布をお臍（へそ）にあてて寝るんだろうよ。あした目が覚めて見るとお札がむれて、かびだらけ。

等と云つたので、買つて来たものを見せもしないで、はめをはずして笑つて仕舞つた。その時から女中はあの人の事を「お臍のお札」と云う名にして居た。けれ共それは、家中三人ほか知る事ではなかつた。

二十六日の日に東京から、菓子と果物と「鳥そぼろ」がついて、同じ日に十二月分の国民文庫が届いた。

夕方、源平団子と云う菓子屋で餅をつかせて呉れと、こぼれそうな腹をした主婦が手帳と鉛筆を持つて來た。家で食べる分は少しでも、食べさせる分が沢山いるので、納屋から二斗もちごめを計つてやつて居た。此処いらの家では大抵自分の家でつくるので、中学の教師の家だの何かでそう沢山頼まれもしないのだそうだ。若し出来るなら「のし餅」にしてくれないかと云つたら、お雛さんの時の、菱餅の様になら出来ると云うので、それをもう少しうすく四角く大きくして呉れと云つてやる。寸法と厚さを持って來た帳面に書いてやる。わかつた様にうけ合つて行つたけれど、どんなものが出来上るやらわからない。あの

手で千切つたベロベロの餅は、小さく四角にきちんと切つた餅を澄んだ汁の中に入れてばかり食べる癖がついて居るので、とうてい餅らしい気持でのみ込む事は出来ない。祖母と女中はお年玉にやる子供の着物や「ちゃんちゃん」を縫うのにせわしく、簾笥の下の引出しひは元結だの風呂敷、袢衿、前掛地の様なこまこましたものが一杯になつた。

三十日の日に煤掃きを若い者の居た時はさせたと云う事だけれ共、女ばかりで、寒いのにガタガタするでもないと、三、四月の暖くなるまでのばして、外廻りを村の者に一通り掃いてもらつた。いつもいつも煤掃きじや、障子の張りかえじや、自分の部屋の大掃除とセカセカして二十六日後落ちつく事がないのに、いつもどおりに変りない静けさに居る事が不思議な様な又、間のぬけた氣持がする。

つめの日に夕方甚五郎爺が来た。鶏を一羽と卵と菜を沢山置いて行つた。

裏の竹藪から二本の竹を切り、庭の隅の松の枝を雌、雄二本下して、麻繩のきれいなもので七五三に結びあげ玄関前に立て、水口の柱に枝松が釘で打ちつけられた。皆甚五郎爺の手際である。風呂を振舞われ、地酒によつて四斗俵を四俵運べた若い時の力を自慢したりした。祖母は七十より四つ五つ上になつた自分の年を数えていろいろの事に出会つた思い出を話し、

「もう私の様になつてからはもうだめだ。

と云いながら、まだ肩や腰が痛い位で壮健で居る自分の体が嬉しい様に微笑んで居る。非常におだやかに来る人もなく、ぼんやりと大晦日が更けて行くのでいつもよりのびやかに次の年を迎える気持が嬉しい。

### (七)

非常に天気が良い。

田畠の面のはてしない広い処に太陽がゆつたりと差して、黃金色の細かい細かい粉末が宙に入りみだれて舞つて居る様に見えて居る。立木の陰、家の陰などは濃くたちこめた靄もやそのままの紫っぽい色がただようて、枯木の梢の太陽が四方に放散する。紅の輝きの流れが見られる様である。

雪降りの日の様に見えるかぎりは真白で散り敷いた落葉の裏表からは絹針より細く鋭い霜の針がすき間もなく立つて居る。その痛いように見える落葉をつまむと指のあたつた処だけスーツととけて冷たくしみて行く。葉の面を被うて居る針は、見れば見るほど面白い

結晶体で、山の様な、谷の様な、花や鳥又は一寸法師の様な形まで、せまつくるしい細かい処に表わして居る。樹木の影が地に落ちて、はでな縞目をつくり、処々に小石が宝石の様にかたい反射光線を出して居る。外の景色ものどかなならば、人々の氣持も静かである。元日だと云つても別に之ぞと云う東京ほどのにぎにぎしさもない。

来る人も少ないし、女家内でもあるのでおとそなんかも少しほかない。一盃おとそを飲めば後は熱酣でなければ飲んだ氣のしない此處いらの連中のために酒が珍らしくまとまって台所にあるけれど、それも、女ばかりの処であんまりお心よくして、酔いしれて、管でも巻かれると始末が悪いと云つて加減がしてある。

祖母と私は紋の附いた羽織を着、女中も、仕立下しの立つたり居たりするたんびにカサコソと音をたてる様な着物を着て、赤っぽいメリングスの帯を、柔くたきすぎたお萩の様にまとまりの悪いデロリとした形恰に結んで居る。顔の処々に淡雪が遺つて居る。平常、あんまり黒っぽくて居て、急ににぎやかな色をつかうので、そんな年でもないのに、いかにも釣合の悪い様子に見える。女中ばかりが、いかにもお正月を迎えた様だ。

校長の家の妻君は、紬の紋附を麗々しく白衿で着て居る。ふだんのかまわないのでその人を可愛らしく見せる。田舎田舎するのが却つて目立つ。

年始に来る者も来る者も女まで、赤い顔をして居る。皆それぞれさつぱりした装<sup>なり</sup>をして袴をはいて居るのもある。いつになく儀式ばつた様子で来るので箸のあげ下しにも気を用<sup>つか</sup>つて居る様に見える。

年賀の言葉なんかも半分位云つて後<sup>あと</sup>はのみ込んで仕舞う。

来るものも来るものもおとそとお重詰とを食べて行く。

「もうはあ、いただかれませんからハイ。

と云いながら、出したものは食べる。

日露戦争に参加して、斥候に出て捕虜になつた在郷軍人は、東京の家の書生の兄弟で、いい機嫌で、その時勇戦奮闘した様子を手まねまでして話した。

沙河附近の戦の時だつたそうで、

「そりやあ、貴方様、見事に働きましたぞえ、そんじやから、足片方なくしても、やつにとつつかまりさえしなんだら、金<sup>きん</sup>しは目をつぶつてもはあ落ちて来ますのし。そうよ。溝ささかしまに、落ち込んだばかりに、聞きたくもない捕虜になどなつて、この次の戦さあ出たら、首の三つ四つは朝めし前のお土産だつし。

肩をゆすつていかにも頼もしい様子をする。この男は、夏にある点呼の時にいつでも、

厚い冬着を着て行つて、湯をあびて帰つて来るのが常だ。何故そんなひどい思をするのかときく人があると、

「戦のときあ、夏と冬の入りまじつた時があるかんない、夏になつたとて、衣裳換え出来ねえ時はあるし。

と云つて居る。顔の造作の小さい茶色の頬骨のとび出た男である。

肥料を自分の畠ばかりへ、沢山やると云つて、祖母はあんまりよくは思つて居ない。一杯の酒を一時間もかかるて飲む。おできのあとか何か、頭の殆ど中央に一錢銅貨位のおはげがあるので皆をやたらに笑わせる。ロシア人はパンをくれと云う事を、

メリゴスゴス

と云うと私に教えた。そんな事はないだろうと云つてもきかない。私のきいたのに間違の有ろうはずがないと云つて居る。

この男が帰ると甚五郎爺とおともさんがつれだつて来る。二人とも、あんまりさつぱりした装をして居ない。おともさんはその男の後姿を見送つて、その丸々した肩をすぼめて一寸舌を出した。祖母の前に来ると、二人ともがやつこらと先ず膝をついて、それからゆるゆるとお辞儀にかかるので、

「いいおひな様だのし。

と祖母が笑う。

「ほんによ。この婆さまにやあ、己が似合わしいと。ハイ、まず明けましてよいお年でござりやす。

二人して、いろいろの事をしやべり合つて居る。祖母は、だまつて笑いながら聞いて居る。炉の前にチンと座つた祖母の紋八二重の黒い被布姿がふだんより上品に見える。どうしても年よりは被布に限ると思つて私は傍から見て居る。

おどもさんは又、もうこの四日に掛ると云う春興行を見たがつて居る。

「貧乏しても芝居は見たいものと見える。あんまり芝居ばかり見たがつて居るからあんな苦しい暮しをするのだて。

と祖母は、おどもさんがもらつた真綿の胴着を抱えて喜んで帰つて行つた後でしみじみと云つて居た。年を取つてから貧しい生活をして居るものと祖母は一層同情するらしい。自分自身に引きくらべてでもあろう。

夕方近くなつてから牛乳屋の人と、あの先に私に石を投げた甚助の家の男の子が母親と一緒に来た。

私はその児を見ると「オヤマア」と云つた様な氣になつたし、その子も間が悪いと見えて母親の陰に顔を引つこめて仕舞う。紺の筒袖を着て、拇指の大抵出た足袋をはいて居た。母親は水をつけて梳いた櫛巻きにし、幾度か水をくぐつた、それでも汚れてだけは居ない着物を哀れげに着て居る。低い声で入口に立つたままお喜びをのべ、

「お目出度う、ござりやすと云うものだぞえ、これ。

と、はにかんで居る男の子の頭を平手で押しつける。

ポクリと否応なしに頭をさげると男の子はすぐ母親のそばをはなれて門のわきに行つて仕舞つた。祖母は、二三枚の着古しの着物と足袋と、子供に何か買つてやれと少し許りの金をやつた。女は、私が気恥かしい思をするほど丁寧に礼をのべて、門柱の処からこつちを見て居る男の子をさしまねいて、

「何か買えとお金を下すつたかんない。お礼云うだ。

男の子はまたポツクリと首をまげて、クドクド何か云う母親の手を引つぱつて帰つて行つた。門の処で振返つてこつちを見た、男の子の、悪団々しい様な、憎々しい目の色を、私はいつまでも覚えて居た。

歌留多をどるでなし、人の訪ねて来るでもない、寒い夜は、早くから炬燼に入つて、い

かにも雪国らしい、しづかな時を送る。

此処いらの正月は、盆よりはにぎやかでない。正月は、ひどい寒さでもあるし、<sup>たくわ</sup>蓄えの穀物があんまり豊かでない時なので、貧しい村人は盆をたのしみに、晴着をつくりたい処も、のばしておくのである。

元日に年始に来ないものは大抵二日になつても来ない。その来ない人達は、旧の正月を祝うのである。東京に居て他家へ行つたり来られたりしてすごす七草まで位の日は大変早く、目まぐるしいほどで立つて行くけれど、此処の一日は、時間にのび縮みはない筈ながら、ゆるゆると立つて行く。

東京の急がしい渦が巻き来まれて、暇だとは云いながら一足門の外へ出れば、体中の神経に、はげしい刺激を受けなれて居るので、あんまり静かにのびやかに暮して居ると、一日と体中の機関が鈍つて行く様に思われる。實際鈍つて行くのかもしれない。道を歩いても、ポツリポツリとほか人に会わなかつたり、たまにガラガラ人力がすれ違う位では、のびやかだと云うのも一月位で、あとは、物足りない、何となく隙のある様な感じを与えられる。眠つたまま正月もたつて行く。羽子を突く音もしなければ、凧のうなりもきこえない。子供達は、何と云う名なのか知らないけれど、地面に幾つも幾つも条を引いて、そ

の条から条へと小石を爪先で蹴つて行く遊びを主にして居る。首に毛糸で編んだ赤や紫の頸巻の様なものを巻きつけて懐手をして、青っぱなを啜り上げ啜りあげ、かさかさな顔をして広い往還の中央にかたまつて居る。犬同志をけしかけてけんかをさせたり、猫に悪戯をしけたりして居る。

女の子は、一本三四銭位の花かんざしをさして、やつぱり頸巻をまきつけて、菓子屋の店先だの家の角などに三人四人とかたまつて、何か話したり、砂利を入れた木綿の「石なご」（お手玉）をしたり、石のおはじきをしたりして居る。木綿の着物にメリソスのお立てなんかにして居るので、妙に釣合が悪くて見つともない。

「きいちやんの帶いいんだない。どこさから買ったのけえ。

「これけえ、

伊勢屋げからよ。

お蚕様の時、偉え働いたちゅうて買うて呉れたのし。

この地方特有の妙に、しり上りの口調で話してなんか居る。

こう云う処に居ると、私と似寄りの年頃の話し相手はまるで出来ない。言葉の違うせいか、きまりを悪がつて、どんなに私が打ちとけても口一つきかないのである。それにまた、こ

の村には割合に、娘や若い男の子が少い様に見える。中学校に来るものは大抵他処のものなので、学校の休中は大変に静かになつて居る。私が話しかけて快く返事をしてくれるものは大方、年とつたものか、女房になつたものでなければならない。此処いらの一体の子供が、はにかみやのくせに悪口をつくから、何だか私にいい感じを与えない。

町の三つに分れる処にある床屋には、沢山若い百姓が集つて居る。

極く極く質朴な処が若い百姓には少なくて、金のある時に町へ行つて買いためたハンケチだの、帯だの、ニッケルの時計だの、指環だのをあらいざらい身につけて、新銘仙の着物等を着て居るのが多い。節くれだつた小指に、鍍金の物々しい金指環をはめて居たり、河畔の様にした頭に油を一杯つけて、紫の絹のハンカチでいやらしく喉を巻いたりして居る様子は、ついしかめつ面をするほどいやだ。何故こんな様子がしたいんだろう。純粹の百姓の様子で何故いられないのだろう。都會の、借金して縮緬の紋附を着る浅ましい気風がこんな山中にまで流れて来て居るのだろう。

教育家でなく、宗教家でないでも、いやな事だとと思うよりほか仕方がない。斯うやつて、鍍金の指環をはめたい男達は、自分の能力を考えもしずに都會の派手な生活にあこがれて、上野の停車場へ降りさえすれば、目の前に金のもうかる仕事が御意のままにころがつて居

ると思つて居る。それほどに思つて居ないにしても、とにかく、非常に易々と成功を遂げられるものだと思つては居るに違ひないのである。

娘でも、東京へ出て一二年奉公でもすれば、立派な奥様になりあがつて、明日はどこの芝居、その次の日は何の会と歩き廻れるものの様に思つて居る。都會の奥様は、日髪、日化粧で、長火鉢の前で鉄瓶の湯気の番人をして居ればすむ様に思つて居る。

東京——都會の生活を非常に理想的に考えて居る事、都會に出れば、道傍の石をつかむ様に成功の出来るもの、世話の仕手が四方八方にある様に思う事、食うに困る事等はない様に思う事等は、東京の生活をしたものがあんまり馬鹿馬鹿しいと思う位いに善い事<sup>おも</sup>づくめに想つて居るのである。東京を見た事もないで、どうしてそんなに善いとばかり想つて居るかと云え巴、東京見物に行つたものの土産話しと、雑誌の記事写真によるのである。

農業休みに十日か二十日の東京見物に出かけたものは、只にぎやかな町の様子、はやしたてて居る見世物、目のさめる様な店飾りにイルミネーション、立派な装で自動車を飛ばせて行く人、ぴかぴかに光つた頭の婦人、その他あれやこれや、只もうにぎやかなパツとしたむく鳥おどしに仕掛けてある事にまんまとおどされて、刺激の少ない処に居て急にさわがしい処に出たので、いいかげん頭が熱くなつて、自動車、電車に幾度か「きも」も消

して、何の得る処もなく、

「いやはあ、東京ちゅう処は、はあ偉えこんだよ。

と帰つて行く。耳のそばで十の金だらいを一時にたたかれた様なガーンとした氣持で帰つて行くのである。そうしてする土産話は、にぎやかな派手な自動車の事や、三越で何百円とする帯を買つて居た奥様の話ばかりである。

雑誌は雑誌で、一文なしで上京して大臣の椅子を占めた人の話や、苦学して博士になつた人の話やが山ほどある。若い者の奮発心を起すにはこの上ない事ではあるが、一文なしで上京して大臣になつた人などは、大抵維新の時にそのきわどい運命の瀬に立つた人ばかりである。義務教育をすましたばかりの若者の頭には時代と云う考えがない。すつかり秩序的になつた今の世の中を維新当時とごたまぜにして居る。そして、自分も大望を抱いて東京へ飛出しは飛出しても、半年位後にはやせてしおしおと帰つて来るか、帰るにも帰れない仕儀になつたものは諸々方々に就職口をさがしあぐんだ末、故郷の人には会わされない様なみじめな仕事でも、生きるためにしなければならなくなる。

東京を一寸も見た事のないものに東京を紹介する雑誌は、責任をもつて着実な考へで東京を知らせ、良い処よりも悪い裏面を多く知らせた方がまだ不難だろうとさえ思われる。

田舎の若者が、皆が皆東京へばかり出たがつて仕舞つては、ほんとうに困る事だらうと思う。

農民はたしかに低級な趣味と智能を持つて居るばかりだと云つて良い。けれ共、農業をする事の大切だと云う事を農民自身に感じさせたいものだと思う。東京へ東京へと浮足たつて居ながらする農業は、目覚ましい発達を仕様はずがない。東北の農業の振わないので、農事の困難なため、都会へ都會へと皆の気が向いて居る故<sup>せい</sup>でも有ろうと思われる。西国の農民は富んで良い結果をあげて居る。農作に気候が適して居るので、農事に興味があつて、自分が農民である事に、満足して、自分の土地以外に移つて新らしい職業を得様などとはあんまり思つて居ないらしい。東北は気候が悪い。農作の結果があまりよくない。それにしたがつて興味もうすいわけだが、農業にしたがう事は、大臣とかわらない、大切な立派な仕事であると自覺し、はたでもまた、雨につけ、風につけての心づかいを思いくむ様にしなければいけないと思う。

とにかく、東北の農民、——これから進歩した農業を仕なけばならない筈の若い者が、自分の故郷、仕事をはなれたがつて居る事は、真にいとわしい事である。





## 青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第一十九巻」 新日本出版社

1981（昭和56）年12月25日初版

1986（昭和61）年3月20日第5刷

初出：「多喜一と百合子 七弔～十三号」 多喜一・百合子研究会

1954（昭和29）年12月～1955（昭和30）年12月発行

入力：柴田卓治

校正：土屋隆

2008年8月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) に作成されました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆様です。

# 農村

## 宮本百合子

2020年 7月18日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>